

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第五十四卷 第七號

日本国有鉄道特別扱承認雑誌第六八三号

倉橋惣三先生追悼号

未





(昭和 7 年頃)



↑ 大正初年頃

→ 昭和25年頃



↑ 大正8年頃 外遊時代

↓ 昭和12年頃



← 大正9年頃 フレーベル墓前にて



幼児の教育 第五十四卷 第七号

倉橋惣三先生追悼

編集主幹 及川ふみ 編集主任 津守 真
協力委員 牛島義友 齋藤文雄 多田鉄雄
波多野完治 山下俊郎 (五十音順)

(本号執筆者は五十音順による)

幼稚園の太陽没す

青柳義智代

倉橋先生は官學で、その生涯を送られた方だが、我々私立幼稚園界の動きについても、深い関心を寄せられていた。かつて、日本私立幼稚園連合会が全国的に組織結成されたときも、心からお喜び下さった。そして連合会その後の發展の状況や、各種の事業についても絶えず注目して下さっていた。毎月発行している「会報」なども詳さに目を通されてよく承知しておられ、「先月号に掲載されていた、あのことはどう決ったか」など質問され、うっかり読み落していた、会報責任者である此方が恐縮したことなどもあった。

そのように、倉橋先生は国公立、私立を含めた、全日本の幼稚園界、つまり日本の幼稚園全体のために、その健全な發達を念願されて生涯を送られた方だと思ふ。一官立幼稚園界

の倉橋先生ではなかったのである。

幼稚園も設置者が異なることによって、国公立、私立と種別されている。そして経営方針や、性格に於て異り区別されている。しかし、異っているが、いづれも「幼児教育」の機關であり「幼稚園」であることに変わりはないのだとよく言われている。事實はそれに相違ない。同じ幼稚園であることに於て共通している。然し、この共通であると云うことで、日本幼稚園全体を納得させ、まとめ得る人格、それは倉橋先生が最後の方だと思ふ。先生のように唯一筋に幼稚園全体の發達を念願されて、公平にして献身的な足跡があつて初めて出来ることだからだと思ふ。

倉橋先生は中野にお住いになり、私も同じ中野でしかも先生の散歩区域内と云う近さである。加えて愚妻も先生の教子である關係から、公私共大変お世話になって来た。特に、小生日支事變当初に召集されたときなど、早朝、早速、愛用のステッキを持たれて御訪問下されて、いつもの温容で御丁寧な御挨拶を頂いたときの、印象など、忘れ得ない思い出がある。

近いので、時々お伺いしては、いろいろと幼稚園のことなど御指導頂いて来たが、先生の人の立場を先づ尊重する御態度、そして直正面きって、自分の意見を主張されなないで、極めて、おだやかに、相手を反省させるような言葉遣いなど、

その風格は個人的にもずい分教えられて来たことであつた。幼稚園教育関係者として、真に望ましい御人格であつたとその点からも、敬慕申上げてゐる次第である。

先生の御逝去は日本幼稚園界の太陽没すの感が深い、それも明日、また東天から登る太陽は期待出来ないことを思うと誠に痛惜に堪えないものがある。謹んで、先生の御冥福をお祈りするものである。

(日本私立幼稚園連合会理事長)

倉橋先生を偲ぶ

浅野壽美子

四月二十一日朝の新聞紙上に倉橋先生御逝去の記事を見た時は、何かしら幼稚園教育の柱を失つたような淋しさにうたれて傍然としてしまいました。

きけばその前日はお元気に庭を歩かれ、食事もすすまされて安らかにお休みになり、翌朝には大往生をとげられたとのこ

と、さすがに先生らしい御最後であり、またそのお徳の偉大さを今更ながら偲んだ次第です。

先生についての思い出は、私には数かぎりなくあります。第一に思い出されることは、先生の御講演はいつもその内容が極めて豊富であつて、美しいしかも味いあることばを使つて幼い子どもたちの姿を語られますのには私はいつも陶然としてしまいます。そうかと思うとまた茶目つたつぷりにみんなを笑わせながら測り知れない真髄にふれていて全く感激してしまいます。もう一度あの先生のお話がかがえたらなあ、と思う気持は私ばかりでなく先生を知るものと同じ想いだらうと思ひます。

第二に思い出されることは、私の幼稚園のいまの建物を建築するときその設計図をもつて市の建築技師の方と上京して二三の幼稚園を参観したり、文部省の御意見をきいたりしたあと、何んとかして先生に御指導いただき度いと思つて御病後と承わり気づかいながらお邪魔した時です。先生は喜んでこれを迎えて下さいました。長くお邪魔して若しお体にさわつてはどの私の心配をよそに、いろいろ幼稚園の現状をきいて下さいまして、持つていった設計図をみられて先生の卓抜な御意見を聞かせて下さつたり、またお茶の水の幼稚園を建設された当時のお話などして下さつたりして、色々参考にすることが多かつたのですが、その時先生が言われましたこ

とでその通りに出来なかったことが二つありました。しかも其の後私の心に強く残っていて、幼稚園の設計について相談をうける度に私は一番先きに注意をしています。その一つは玄関です。先生は「大人の玄関がすばらしく立派で子どもの玄関が極めて貧弱な幼稚園がよくあるが、これは子どものための幼稚園であるのにもおかしい。幼稚園では大人も子どもも同じく立派な玄関から出はりたいものだ」といったことです。

その二つは便所です。「便所は特に細心の注意をはらって作らなければならぬ。そして男子用、女児用の便所は異った場所に設けたい。出来なければせめて真中に仕切りをつけて入口を別にしたい」といったことです。

第三に思い出されることは、私の幼稚園が終戦後の社会事情のため、幼児数が非常に多くなりましたが、敷地、予算等の点から中々思う通りにならないことをお話ししますと先生はその幼児数を問われました。そこで私が三百八十人で十一組ですと答えしますと「ホウ幼稚園のオバケだね」とびっくりされました。なるほど、幼稚園のあり方から考えますとまさに化物のような存在だといまさらながら先生の形容のうまさに感心させられますし、現在でも皆さんにこの代名詞で私の幼稚園を紹介しています。

其の後お宅をおたづねしたり、フレール館でお逢いした

りいたします度に、いつもかわらない温顔で励まして下さいましたことは、感謝に堪えない次第です。

ただ一つの心残りは、一度名古屋へおまねき申上げて感謝の会をしたいと私はもちろん公私立の幼稚園の皆さんが念願していました。そこで私が先生にこのことを伝えますと、「約束だからきつといくよ」といって下さったのですが、御病氣やら、またお体にさわってはとこちらで用心してましたためその願いがついに達せられなかったことであります。

ちょうど先生の御納骨の日、大阪の愛珠幼稚園の中村先生と中野の御宅へ伺って御仏前に拝しまして、一生子どもの教育のために捧げて下さった先生の御功績に対して心からの感謝と御冥福を祈りましたが、飾られている写真は生前そのままの笑顔のお写真で、まだ先生が生きておられ「ああ浅野よきたね、子どものためにしっかたのみますよ」といつもいわれるお声でいわれているような錯覚をおこし、一面何か心暖まる思いがほのぼのとさす一方、ああもう先生はいないのだという心淋しい気にもなりましたが、先生の教えをこれからほんとうに生かすべく努力しなければならぬと、新たな抱負を心にいだいてかえってまいりました。

「先生は幼稚園の神様だ」と深く信じながら……

(名古屋市立第三幼稚園長)

倉橋先生についての

おもいで

石川 謙

わたくしは、この二、三年御無沙汰をしていて、しみじみとお話をうかがう折を持たなかったが、先生を思い浮かべる機会はいしばしばあった。今年の一月頃にも、NHKの「光を掲げた人々」で先生の業績をひろく紹介したら、という話が出たことがあった。現存の日本人は取りあげない建前から委員会で一応沙汰やみになったが、その席上で誰もが先生の幼児教育についての業績を認め合ったのであった。こえて三月には平凡社の「現代人名事典」に先生の御履歴を執筆したのであった。わたくしが先生を存じあげたのは、ずいぶん昔のことだ。まだ東京女子師範学校の校舎がお茶の水にあった頃、当時附属高等女学校の主事を努めておいでになった先生を、主事室におたずねしたのがたぶん個人的にお目にかかっ

た最初であった。その後、昭和十二年の九月から女高師にお世話になるようになって直接に先生の御指導を受けたり、御様子をうかがったりする機会が多くなった。先ず第一に思い出されるのは先生の、小柄ではあったがよくお肥りになったたくましい御体格と御健康にふさわしいきびきびとした御活動ぶりである。その頃先生は女高師の教育科の主任教授をとめながら、附属幼稚園の主事を兼ねておいでになった。そうしてその上に幼稚園の保育を養成する保育実習科の責任者として立っておいでになった。先生のこの女高師に於ける雄弁に物語っているように実際に幼児教育の仕事を指導しながら幼児教育の理論を研究しておいでになった。それだけではない、幼稚園教育を学校教育の一環として、国家の学校制度の中に織り込むように社会の世論をつくり、文部省の動向を導いてもおいでになった。ということからつながらる問題であるが、幼児教育にたずさわる教育者をはぐくみあげる教育機関を制度化することにも大きな努力をはらっておいでになった。それだけでもない、幼児を幸福にすくすくと成長させるには、学校の側の努力だけではいけない。家庭での、お父さん方、お母さん方の仕打しうちを現代化し、教育化しなければならぬ。というのでこうした家庭教育の面に向けて非常な努力をささげられた先生が文部省の社会教育官として、文部行政に協力されたのもこの立場からであった。こう見てくると、

幼児教育の、實際・理論・行政、幼児教育のよって立つ基盤ともいべき家庭・社会の改善計画など、およそ幼児教育に關するありとあらゆる場面を、その広い視野の中におさめてこの一筋に全靈を打ち込まれたのであった。先生のような雄大な視野のもとに、ありとあらゆる關係方面に向つて努力をされた先人が、いつたい小学校教育の方面にも、中学校、高等学校、大学の教育の方面にも、たった一人でも見出すことが出来るであろうか。私は先生を持った幼児教育界の幸福をしみじみと考えると同時に、先生の偉大さを偲ばずにはいられない。倉橋先生のたくましい御健康から連想して、何時のまにか先生の業績方面へ流れこんでしまったが、先生についての思い出は、まだまだある。先生が生れながらの幼児教育者として、立派な素質を持っておいでになつた点もその一つである。晩年の、おそらく六十才を越えられた後の大先生の倉橋先生を幼児達がまるで遊び友達のように親しんで、なだれをうって寄つてくるのを迎えて、嬉しそうにニコニコしながらいかにも自然にその中へ融けこんでいかれる風景を、身近にながめて私は幾度かため息をついたのであった。この一つだけでも、先生の残された数々の業績に較べてまさるともおとらない偉大なものを感じずにはいられなかつた。もう一つだけ先生についての思い出を述べさせていたただくならば、先生が幼児教育についての我が国の現状の良さにつけ、悪さ

につけ、何時も深い反省と責任とを感じておいでになつた点である。昭和十八年頃のことであつたが、その当時の国家情勢から、自由主義の養育法がひどく圧迫された時のことである。或る若い無遠慮な学者が「幼児教育を今日のようならしめないものにしたのは、倉橋先生の罪である」と云つた意味の言葉を先生に向つて、あまりつきつめた態度でなく話したのを、私は側について聞いたのであつた。すると先生は昂奮もせず、弁解もせず、深くくんな様子をなさつて「その点今ほくも丁度考えているところである」とお答えになつた。私はこちらで、先生が教育上の自由主義であつたということを感じるのではない、日本の、全景の中に点じ出される幼児教育の全ての姿を、我が身の責任において感じておいでになつたかと思える先生の、身をなげこまれた心構えに深く深く心をうたれるのである。

(お茶の水女子大学教授)

×
×
×
×

倉橋先生の思い出

岩 崎 香

倉橋先生は日本の幼児教育にとこしえに消えることのないともしびをかかげて、私共に行くべき道を示して下さいました。幼児教育にたずさわる私共の心のささえでいらっしやいました。たとえ直接お目にかかる機会は少くても「幼児教育やキングダーブック」を手にします度毎に早速御名前を見出すことを楽しみにしておりましたのに今はもうそのお言葉に接することもなく、どんなにおまち申し上げても御目にかかることが永久になくなってしまいました。先生御生前の思い出の二つ三つを申しあげまして心からの御冥福をお祈り致しますたいと存じます。

まだお茶の水に校舎がありました頃、保育科へ入れて頂いて間もなくフレイベルの御誕生の日にあたる四月二十一日そ

の御生涯について倉橋先生から御話をうかがいました。花の香りもただよってくる様な春の夕、紅に黄に紫に色どられた夕焼けの下で偉大な教育者についてあこがれと高い理想をもってお話になったその時のお姿がフレイベルその人の面影と重り合って先生への最初の思い出ともなり又強い感動にみちた印象ともなつて今ここに思い出されて参ります。

短い期間だけしかお講義をうかがう事ができませんでしたがけれどある時は美しい詩の様な又ある時は流れる散文の様なお講義であつた事を折にふれて思い出します。

ある朝のお講義の時に「皆さんは学校へ行くのだからと大切に本をもっていらっしやるでしようけれど本はたまには忘れても幼児の為にお掃除の仕たくはいつても用意していらっしやうって下さい」と云う意味の事をおっしゃつた事がありました。又幼児の描いた絵のとりあげ方についてのお話の中に軽々しく絵の批評したりお上手ですねと幼児の前でほめるなどと云う事はよくない事ですよとおっしゃいました事をおぼえております。

いっぞや愛育会の児童相談所のお仕事を手伝わせていただく事で母校へ御相談にうかがつた事がございました。何時もにこにこしたお顔でいらっしやいました。その日は又格別御気嫌がおよろしかった様にお見受け致しました。私が用件を申しあげますと早速添書を愛育会の理事のどなたかに宛て

てお書き下さいました。そしてその時、私も静岡県人ですし、貴女も静岡県で同県人です。同県人のよしみで紹介の労をとつてあげましょうね」とおっしゃって下さいました。御手数をおかけ致しました御蔭様でそれからしばらく愛育会で勉強させていただく事ができました。

何かの時に、入学試験の面接の時には一人で日本中の幼稚園をしょって立つ様な勢いでしたがこの頃はどんなですか」とおっしゃっておわらいになった事がありました。が今ではそんな小さい思い出も大変なつかしいものとなってしまいました。

先生の御足のあとをたどりますにはあまりにも力のない欠点の多い私でございますが、少しでも御理想にそって幼児の幸せのためによいしもべとなる精進を、今日も明日も続けさせていただく事だけが、御恩にむくいる唯一の残された道となつてしまいました。何時までもいつまでも先生がいて下さる様に思つて甘えておりましたが、倉橋先生はもう私共のグループの中にはふたたびおいでいただく事がなくなつてしまいました。

X
X
X
X

倉橋先生のこと

牛島 義友

倉橋先生は詩情豊かな教育者であられたが、又科学的研究の最もよい理解者であられた。幼児教育界がとかく経験主義に立ち、科学的研究から取残されていることを最も苦にされたのは先生であつた。

東京女子高等師範学校では共通科目である教育学を受持たれていたもので、他の化学や国語のように専攻の学生が居らずしたが、教育や心理学の研究の地盤がないことを遺憾に思わせていた。

したがって大学への昇格の機会に児童学科の創設の構想を立てられた。女子大学において心理学が独自の研究を發展させるには児童学が最もふさわしいと考えられたからである。ところが、従来このような講座が無かつたために、新たに

創設するために非常に困難に遭遇した。人事的に言っても、一方では他学科の先生に退いてもらい、児童学の教育を新たに割込まねばならないし、場所的に言っても、本館の中では研究室は割当てられず、幼稚園の中に二室を割いていただいで、辛うじて創設が認められた。

この時の先生の御苦心は、長い教職生活の中で一番心労されたことであろう。あの温厚な学内の信望高い老教授が、この問題のために方々から非難され、中傷され、侮蔑の言葉さえ度々受けながらも、先生はじっと耐えて、ひたすら児童学科の成立のために苦勞をなされた。この心勞が先生の御健康を著しくそこなつたと云えよう。

このように苦心して創設された児童学科で、しかし先生は一度も講義をなさらなかった。既に健康がそれを許さなかつたと云うよりも、初めから先生は教授として華々しく活動される御意志は無かつたことと拝察している。全く私を無にして、日本の児童学の科学的基礎を確立するために最も尊い奉仕をなされたのである。

又先生はいわゆる科学的研究には飽き足らず高度の洞察的研究を要求された。わかりきった統計や非生産的な研究に対しては風刺をもって急所をつき、先生の優れた経験のちえによつた研究方向を指示された。研究発表会の時には先生の批評や感想の方が研究よりよほど面白く、啓発されたもので

ある。

もし二十年早く児童学科が創設されていたならば、倉橋學派が生れ、日本の児童研究は世界でも最も質のよいものが出来ていたと思う。

子どものために 先生方のために

及川ふみ

大正六年、倉橋先生が東京女子高等師範学校附属幼稚園主事になられて、先づ保育の実際について変つたことの一つに「会集をやめましょう」ということであつた。「免に角幼稚園の一日の保育は、自由遊びから段々まとまったものになつていくべきだと思ひます。自由遊びから仕事へというのが保育課程の本質だと信じます」

これは倉橋先生がその著幼稚園真諦に会集について意見をのべられているのであるが、その当時幼稚園の先生の新米と

しての自分は、この会集廃止論は本当にありがたかった。毎朝の会集にお立ち番、おひき番があつて、お立番は幼稚園全体の幼児をU字形に三重位に並べた中央に立つて、お話をしたり、子どもに歌をうたわせたりする司会者になるわけであり、おひき番は、司会者の云うなりにピアノをひくのであつた。大人の世界から急に思ひもかけない幼稚園の先生になつた自分であつたので、幼児に適切な言葉づかいが出来ない。ことに関西なまりが強くて来て東京風な話をするのが苦手であつたので、この会集の司会は、一入つらいものであつた。おひき番はピアノが下手でこれまたなかなかの重荷でもあつた。就職して一年会集なかりせばと願つていたときでもあつたので、ほんとに会集廃止論のありがたさは、たとえようもなかつた。

ある朝、先生方皆子どもをつれて、わたしについて来て下さいということ、組の先生が先頭に立つて子どもを引きつれどんどんかけ走つた。講堂前の広場へついてからは、ぐるぐる渦巻になつて走つた。はたと行進がとまつたと思つたら倉橋先生が大きな声で「お日様今日は」とお日様の方に向つておっしゃつたので、皆もこれをまねて大きな声であいさつをしたら、自分のそばにいた子どもの一人が何ーんだといったのを思ひ出す。幼稚園雑草の中「日光の子ども」の中に「春の日は煦々たり。いざ子供等と共に日和に出でん。太陽

をして存分に吾等と子供等とを教育せしめんがために」と云われている。

人形芝居のはじまり、子どもに人形芝居を見せるのに人形芝居の舞台が幼稚園に出来た。幕は揚げ幕で、なかなかしゃれたローケツ染であつた。これは高島屋謹製であり、菅原教造先生の御心づくしの贈りものであつた。子どもの為の人形芝居であつたが、倉橋先生が先ず職員室に舞台を据えて観客の私共のみせて下さつたのは「塩原多助愛馬青の別れの場」であつた。子どものためには外題が何であつたか、いろいろ考へても思ひ出せないほど塩原多助の一幕は熱演ぶりであつた。

動物園ごっこ 上野の動物園へ見物にいつて来てから、床上積木や、粘土などで動物園ごっこをしたのを思ひ出す。ごっこ遊びを指導していただいた始めである。

先生方の為

本郷弥生町あたりであつたかの様に覚えているが、春休みの一日先生方皆を、彫刻家新海竹太郎先生のアトリエに連れていつて下さつて、いろいろ作品を拝見したり、御話を伺つたりして勉強させていただいた。その夏、文部省の講習に堀進二先生を招じて粘土製作の指導を受けた様であつたが、都合あつて自分は帰省してしまつて残念であつた。そのモデルになつた作さんという好好爺さんの、本校の小使さんがあつたのを思ひ出す。受講者中の一人が製作途中こまつて頭を

上下をあべこべにしたなどこの講習はなかなかむづかしかった様子をあとで書いた。

滝の川学園の見学にも連れられていった。先生方と一緒にこの学園に育てられているいく人かの異常見について園長石井先生御夫妻の御話を伺い感激した事もあった。

大正六、七、八年は次々と子ども直接の為に、先生方の為に、いろいろと勉強させていただいたが大正八年十二月十三日、どんよりと曇った小雪ちらつく日、横浜より外遊の途につかれた。

その年の十一月二十八日ニューヨークよりの御手紙の一節南の方の旅行から帰って来て、十月十九日附のお手紙をおくれて拜見しました。

先ず何から書きましようか。やっぱりヨウカンの御礼から書きましよう。但し、ヨウカンの方へさきにくいについて、それから皆さんのお手紙を開いたのではまさかにはありません。お手紙の方を先ず拜見してそれからおもむろに、おもむろらしく、ヨウカンにとりついたので。そして、どんなに味わったとお思いですか。

先づ第一の一ときれは久し振りのあの滑かさと甘さどで舌が酔ったのです。次の一ときれは、ああ玉露がほしいなあと少し精神が働いて来たのです。その次のもう一ときれは、突如として我が精神の一部にある淋しさを誘って来た

のです。どうしたんでしよう——いくらヨウカンの味は同じでも、ここは日本じゃない。いくらヨウカンの味は同じでも、ここは皆さんといっしょにあの大テーブルをとりかこんで居るんじゃない。と斯う精神が大に働いて来て、つまり平生気のつかずに居る、ものたりなさ淋しさが、久し振の藤村のヨウカンから、ふらふらと誘い出されたのです。そしてヨウカンの甘みといっしょに溶けあつて味わわれたのでしよう。こういうのを甘い淋しみというのです。ようか。またじょうだんにしてしまつて御免なさい。

青嵐氏の絵の御礼と、手拭の御礼と、幼稚園の写真の御礼とは、ひきくるめてただ有難うだけにしておきましよう。旅でああいう心づくしのものを受取つた時の心持ちは、いくら書いたって、どうせ、あなた方には、到底おわかりにならないのですから。いいえ決しておわかりにならないのですから。(幼稚園の写真はコロンビア大学の幼稚園のミスヒルの処へもつて行つて説明つき自慢つきで贈つて来ました。)

皆さんの御健康でお褒りないのは何よりです。

お手紙に大抵はお茶の水に越すところはなくとありますが全くそうです。あんないいところは世界(まだ半分です)が)中ありませんよ。誰が何といつても世界第一です。但し建築はあれより少々いいのがあります。設備も少々い

いのがあります。ただあの幼稚園殊にあの職員室にホーハクとして漲って居る、呑気性、茶目性、笑い性に至っては他に類を見ませんね。而して此のお茶の水幼稚園職員室たるや実に世界無比です。如何ですこの頃も此の大スピリットがホーハクとして漲って居ますかね。

大正十一年三月元氣よく外遊から歸られた。みだしなみのよい先生が二ヶ年間の外地生活で一きわみがきがかかってまぶしい様にスマートな容姿になられた。

外観だけでなく毎日の保育にいろいろ新しいこころみで満ち満ちた幼稚園であった。やがてその結晶が幼稚園真諦となつて誕生したのである。

故倉橋先生を

お偲びして

大瀧 晴

私が、初めて倉橋先生の御弟子として先生の御指導をいた

だくようになったのは、大正四年のことでもございました。私は大正二年三月東京女高師文科を卒業して同校附属幼稚園に奉職したのでしたが、倉橋先生は、それから二年後に、当時主事であられた安井哲子先生が、東京女子大学の創設と共に学長として就任されましたので、その後任として、附属幼稚園の主事になられたのでございました。当時、先生は、二十七、八才、本当にお若く潑刺としていつもにこにこして元氣にあふれていらっしやいました。先生は、当時、外国で御勉強なさつて幼児教育に関する新しい学説を携えてお帰りになつたばかりで、先生の御講義、御指導は幼児教育にたゞさわるものの憧憬の的でございました。先生の心理学者としての鋭い御眼識は、実に恐ろしい程私共の心の中を見抜いて細かく分析し解剖してえぐるようなメスを入れて、容赦なく批判御指導下さいました。併しその御指導が実に明瞭で、わかり易く、ユーモアに富み、快く笑いながら心深く刻みつけるといふ先生独特のものでした。これは先生の御指導を受けられた全国幾万の倉橋先生崇敬者の等しく御同感下さることと信じます。

先生の自由主義の幼児教育は、当時の古い形式的な幼稚園しか知らない私共には何も彼も驚異であり、そして即時に実現の希望をそそることはかりでした。しかも女高師附属幼稚園は全国にさきがけて先生の学説を實現しなければならぬ立

場にありましたので、お若い主事さんを中心に若い私共保母は、日々希望にみちて企画をすすめ、先生の御説を片はしから実行にうつさせていただきました。

今まで、だんごを作り、象を作り、猿を作り、只、それだけとして終って居た粘土細工を、今度は動物園を作ることを目的として子供はそれぞれ希望に燃えて一生懸命に作って、動物園を開き、見物ごっこをしたり、国技館の春場所、夏場所ともなれば、遊戯室に四本柱をしつらって相撲をとらせて見たり、今では何でもない事でも、当時としては、本当に新しいシステムとして、日々参観に見える全国の保母さん方をアツと言わせて鼓舞したものでした。私はその後、女子学習院に転任して昭和五年まで同校教授として勤務することとなり、学習院では、小学校、中学、高等学校と順々に各期に亘り経験をふませていただき、女高師文科を卒業した者としては、珍らしい、ありがたい歩み方をさせていただきましたが之も偏に倉橋先生の御指導の賜物で、私の一生を通じての教育観は実に倉橋先生の御指導によって打ち立てていただいたもので、如何なる場合もこの教育観の上になつて、処理してゆけばよいということを体験させていただきました。先生の教育学説は実に高迈なもので、戦争の前後を問わず時代の推移にかかわらず永久不変のものであるということを感じしてただただ感謝と感激あるばかりでございます。倉橋先生は私

共家族全部にとつての恩師でいらっしやいます。私の主人も教育家でしたが、先生を敬慕申上げること私に劣らず、機会ある毎に先生の御指導を仰ぎ、特に茨城県の高等女学校長をしている時は、度々先生を招聘して御講演をお願いしました。長女も女高師文科在学時代に御指導をいただき、二女、三女は、保育実習科に入学して御手厚い御指導をいただきました。特に二女朋子ともこは卒業と同時に学校の推薦で、恐れ多くも、当時御幼少の皇太子殿下の側近奉仕の榮譽を担わせていただきましたが、その拝命より御勤めの五ヶ年間で、どの位先生御夫妻に御厚情蒙りましたか、又御心配をおかけ申上げましたか、何と御礼を申上げてよいか分らぬ程でございます。はじめ東宮御所に御奉仕の命をいただいた時、私は何も分らぬ若い娘が御所に上つて失礼な事があつては大変だと心配のあまり、当時女高師の作法の担当して居た岡初野氏が私の親友でしたのを幸いに私は倉橋先生に「先生、家の娘は特別幼稚でほんやり者ですから、御所に上る前に、暫く岡先生からお作法でも教えていただいたら如何なものでしょうか」と御相談申上げた所、先生は形を改めて「とんでもないことですよ。礼儀作法の立派な娘さんなら華族さまから、いくらでも探せるけれど、行届かなくても純真なありのままがいいと思つて推薦したのですよ。馬鹿な所をお目にかけるのですよ。お遊びのお相手の時も只お側で丁寧におじぎばか

りしているのでは駄目で例えば、雪が降り積ったら、宮様の事を放つて外に飛び出して自分達が面白くて夢中になって雪合戦を楽しむのが本当の忠義（その時代の言葉）なのですよ」と私の心得違いをいまして下さいました。このお言葉の中にこそ先生の御理想がうかがわれるとしみじみ悟らせていただきました。当時から長い間先生は、宮中に伺候して皇后陛下に心理学の御講議を申し上げられたとも承つて居りますが何れの点から考えましても感慨無量の思いが致します。

先生の思い出は書いても書いてもつきません。地方に出ましてからは先生が御講演にお出で下さることをどんなにお待ち申上げましたか、又ラジオの放送をどんなに嬉しく承った事か、又毎月の「幼児の教育」の先生のお言葉をどんなになつかしく読ませていただきました事か、あゝ、しかし、今はもうそれも叶いません。私共はただ先生の御指導を一生の柱として、生のある限り及ばず乍ら、世の為人の為に、又幼児教育に微力を捧げさせていただきます、先生の御高恩の万分の一にお報いさせていただきますと誓うものでございませす。

× × × × ×

人間倉橋惣三先生

大塚 喜一

日本の保育界の恩師倉橋惣三先生が、フレール先生の誕生日に、久遠の故郷への道筋を遺して還られた。その翌日、四月二十二日の朝六時過、ラジオが先生の御急逝を告げた時僕は前学年の収穫の成果を謄写原紙一枚に刷ったものを用いてその日の第一、二時限の教育哲学の講義（保育二年生選択科目）の幕開けをしようと構えていた際であった。

終始一貫して幼児の純情に引きつけられ、そこから新に出直して保育者自身とその子とが一体一如となる、そのような純一になり切った極致が、方法や手段の入るすき間のない保育の真諦であり、人間を再創造する樂園である。将来保母たるべく志を立てて勉学して居る若い女性達から入学当初に提出させた立志の動機を記したものに、倉橋先生がこのよ

うに目指して居られた純情の交感を体得した手記を見出したので、それを橋として先生の御意図を想い起して行きたい。

○ 子供を本当に心から愛する事によって、とても大きな信頼を受ける。これは私が体験した大きな力であった。その信頼は、慰めになり、又力でもある。献身的に何事もすれば、子供にもそれが伝わりと云う事も、しみじみ実感せられた。

○ 『就学前の教育』と題された岩波講座『教育学』抜刷は先生から小生に送って頂いた貴重な御力作である。特に人生の基本教育として伸びる力の根本たる自己發展力を養う事により、就学後の分化した教育方法でなく渾一的な生活活力を充実せしめる任務がある。そこを先生は「生活による教育」と云い表わされた。「真に彼の生活と云い得るものが彼の全体の活動であり、その極致として彼そのものを捧げ尽すものである事は、誰も知る事実である。而して其の生活は人間事実として、最も具体的なものである」と述べられた実質が、方法として前提せられない直接の感応を呼び起して「保育者自身の」生活の持つ動き、力、換言すれば強く生活されて居ると云う事が、幼児に及ぼすところの誘発的効果こそ、就学前教育法として重要なものである」との成果をもたらす

ならば、生活の中軸が一貫して人間同志の交りを全人格の結合へと高め上げて行く一筋道が歴然と見出される。そのように純一に生き切る力が形にかかわらず唯一心に己を尽すうちに伝わって行く有様を、特に印象深く学び得たのは、大正十三年七月、大阪に於て「幼児教育原論」の講習を受け、又、昭和七年八月十六日から五日間、朝六時半から七時までJOKから「親と語る」の放送をお聴きした時であった。前者は今後幼児教育に関する問題の解明の指針とすべき必要を感じて謄写製本して先生にも御覧頂き、小生出身の堺第一幼稚園の保母方とも学び合い、昭和五年に平安女学院保育科に奉職以来は「教育学」のテキストとして毎年講述して来たものである。先生は先ずフレイベルの若き日に直観せられた幼児の自発活動力が、我々を幼児教育者たらしめる原動力であると説き起された。この幼児が本来有する自然に副うていつくしみはぐくむ保育方法の原則として挙げられた。

具体 相互 共鳴 機会捕捉

の様相は、幼児を保育する方法の適否を批判する根本態度を諒解し会得せしめられる「原論」である。殊に、他の時期や場面と対比して、幼稚園と云う特定の教育の施設が幼児達の生活を保育する使命を達成するために、如何様に運用せらるべきであるかを懇切に解明していられる。原理を實踐して行く道筋を歩ませつつ、自分と云う心のへだてのない純情に共

感して尽きない生活の源泉から湧き起り溢れ漲る喜悅・感激は、最近発行せられた「子供讃歌」に至って最高調に歌い出された感がある。この好著が先生の偲び草となるであろうように編まれてるのは本当にうれしい。この追悼号に拙文を依頼せられた文面に、「故先生の御生前、特に御親交の厚くあられました」と記された恩師の御風格や御誨語が、本書中に「彼」と名付けて語り合って居られる各地の人々との人間交渉の中に読めば読む程鮮明によみがえって来る。その源に尋ね入ってこそ、編集企画せられた人間倉橋惣三先生の「久遠のこども」(昭和二十八年十月五日夕、京都山端平八にて御筆を頂き「欣童」と雅号せらる。本書八の終参照)の全人格を象徴する一員たらしめられよう。本誌に寄稿せられる諸師とともに、この「子供讃歌」の読後感を語り合い、その交感の場に読者も本誌を通して共に住ましてみたい。前述の「幼児教育原論」を「教育的惜心」から発動せしめられた源が、本書の三二頁に見出されたことと、「家庭教育行脚」の中に「いろいろの違いを知って、その根にある同じものの深さが味わえる」(一七〇頁)と遠観せられた偉いさを讃えて、我等も亦「母と語る」道を先生に従って歩まう。(三〇、五、一四、一一、三〇)

(平安女学院短大助教授)

噫、倉橋先生

菊池ふじの

昭和三十年四月の二十二日、朝七時。

朝刊をみていた家の者は

「おお！ 倉橋先生がなくなられたぜ」

と、おどろいて私に知らせてくれた。

「え？」と私もおどろいてとんでいき、その新聞をうけとって、信じられない気持でさがした。

……幼児教育の先覚者……中野千光前一〇番地……

もううたがう余地もない。倉橋先生のことなのだ。

私は、ええ！ としばし杲然として声も出ない。

「四月の二十一日午後三時五十分」

昨日のこの時間には、まだ幼稚園について、しかも及川先生山村先生といっしょに、先生の御近況のお噂をしていたとき

なのだ。どうして先生の御臨終が、新聞で知り知ることができなかつたのだらう。何かよそよそしい第三者みたいな割切れない心を残した。この心の混雑の中に、ふと気がついた。四月の二十一日。それはフレーベルの日。もう一度私は新聞を見直した。たしかに「四月二十一日午後三時五十分」とある。

日本のフレーベルと言われていた先生は、フレーベルの記念のその日に亡くなられたのだ。偶然とは思えぬくしき因縁に、一瞬私は肅然となった。何か神のおひき合せとでもいうものがあるのではないのかしらという気がした。

先生の死が事実とうけとれたその瞬間から、涙は止め度なく頬を流れてくる。

「とにかくとりあえずお宅へ伺ってみることだな」と家人に云われ、仕度もそこそこに家を出た。

駅までの途々、電車の中、拭けども拭けども流れる涙をどくすることもできなかつた。

早く中野のお宅へ伺って、奥様の前で、あたりのことを心配せずに思いきり泣きたい。そう思って、眼のかすみを払いつつ急いだ。

通いなれたご門から玄関までの長い石だたみのみち。世には奇蹟もあり得ると心の一隅でささやく。だがもう天幕が張られて、受付の準備もできていた。もう、先生の御死は確實

なものである。玄関に立つと、受付の方が見えた。名を申し上げると中から奥様が出ていらした。何と申し上げてよいかのどがつまって声がでない。漸く

「御無沙汰を申し上げていて何とも申し訳がなくて……新聞で知って……」ここまで言うともう我慢ができない。とうとう声を上げて泣き崩れてしまった。奥様も、両手を顔におしあてていらっしゃった。

ややあつて

「いいのよ、家でも誰もいなかったの、私だけたった一人だったの」

と先生の御臨終の御模様をつぶさに話して下さった。

何という突然のことだったのだろう。あんなにもお家中の方々の至れり尽せりの御心づかいの中に、申し分のない御幸福な日々をお過しになっておられたのに、思いがけなくも、全く思いがけなく、御長男様は御出張、青山にお住いの御次男様も御臨終に間に合われなかつたとのこと。先生らしからぬ彼岸への御旅立ちであった。しかしかくべつのおくるしみもなかつた、安らかな御臨終の御様子を伺って、先生は、やっぱり、一生涯、おしあわせな方だったのだなあ！と、つくづく思ったのであった。

先生の想い出は尽きない。

どの場面を思い出しても、円満な、温容溢るる先生の面影が浮かんでくる。

縞のズボンに黒の背広、これは先生の終生の御服装であつたかにさえ思われる。先生のおからだによく合ったこのとりあわせは、独逸のさる学者——名を忘れた——先生の崇拜していらつしやつた、その学者のいでたちなのださうである。先生も盛夏以外は、この服装でいらつしやつた。先生のあのおからだつきによく似あつた、あの端正な先生のお姿。

それから、先生のあの御講演。感激させられたかと思うと笑わせられる。笑わせられたかと思うと考えさせられる。幅の広い、その深い、それでいて、詩情とユーモアの絶えず溢れ出るお話。

先生が、晩年、教育界から退かれた後になつて、ひとしお先生のお話のお上手なことが痛感されたのであつた。殊に感じ入つて、終生忘れられないのは、テーブルスピーチであつた。私も先生と同席した御弟子達の結婚の披露宴において、先生のなされた、御温情とユーモアの満ち満ちた二三のテーブルスピーチは、並みいる人々を感激もさせ、笑わせもしたことであつた。

先生は又文章もよくされた。いつも大きなデスクに向かわれて、楽しそうにペンを走らせていらつしやつた。先生の御風格そのままの、ふくよかな、詩感溢れるうつくしい文章で

あつた。

先生は又詩をよくされた。和歌も俳句も。いまだに職員室の戸棚を開けると、事務的なハトロン紙の袋の上に、先生御直筆の、俳句や川柳を墨あざやかに書きながされたものが出てくる。私達が、戸棚や机の整理など忙しくしているとき、先生はよく、そばでそれを見ておられた。そして傍らの硯箱をとりよせられて、すらすらと和歌や俳句、あるときは川柳などをものして私たちに示される。そのお心持の中には、働いてる私たちへの、こまやかな御いたわりのお気持が溢れていて、私たちをなぐさめ励まして下さり、又先生独特のユーモアでもつて、緊張をといて下さる。だから大掃除とか、学年末のあわただしさも、いつも楽しいものになり変るのであつた。

職員室のこの鏡、あの筆筒、何もかもが皆想い出の種である。あの場合、この場合といろいろの先生のお姿が私の胸の中を去来する。が一番私の心の奥に刻まれて生涯忘れることのできないのは、何といつても、大正十一年の春四月、先生が欧米二カ年の留学を終えて帰朝されての、初のお講義のときの印象である。

上級生から伝えきいていた先生、生徒の親愛と敬慕を一身に集めていらつしやつた先生のお講義を、どんなに待ちこがれていたことであつたらう。もとのお茶の水の赤練瓦の校舎

であった。恰も外はうらかな春、桜花爛漫の春、先生のだ
い好きな春であった。

のこのこと教室にはいつていらっしやった先生は、壇の上
に上って椅子に腰をおろされた。しばらくは窓外の景色に目
をやられていた。

「いい季節ですね」

「皆さんはどんな本を読んでいますか」

「シェクスピアを十以上読んだひと？」

「エミールの開巻第一に何とありますか？」

などといったお言葉であった。

そして若いときに一生懸命に勉強をしておかなければなら
ないと論じて下さった。時には時事問題、ときには詩のはな
し、音楽のはなし絵のはなし、と御専門の教育学は言うに及
ばず、こうした一般教養のおはなしや芸術の世界にも私共の
眼を開いて下さったのが先生であった。いつも楽しそうに熱
心にお話をして下さった先生、私たちは、つい、先生を
「エンジョーイ先生」と綽名してしまった。

先生は、ほんとうに人生をエンジョーイして逝かれたので
ある。
(お茶の水女子大附属幼稚園教諭)

倉橋惣三先生を

追悼す

岸 辺 福 雄

× 日本幼稚園教育が盛んならんとする今日先生を喪った事
は、実に国家の大損失であります。噫。

× 先生が東大の心理学部を卒業せられましたお若い時から別
懇に願った。と申すよりも教えられたのであります。左様指
を折りますと、五十年位以前の古い話であります。

× それより保育学につき、玩具につき絵本について親しく指
導を受けたのであります。それ故に、指導を受けた方は沢山
ありましようが、私のように五十年にわたって親しく教わつ
たり懇意につきあつて戴いた人は少ないでしょう。それ丈け

先生を失った今日は限りなく寂しく心弱さをおぼえるのであります。

× 孔子の弟子で巫聖と称された顔回が、若くて死にました時に、孔子は『学を好み、怒をうつさず、あやまちを再びせぜず不幸短命にして死す、今やすなはちなし』と追悼されて居ますが、倉橋先生は七十二。敢て短命ではありませんけれども、日本の幼稚園教育の漸く盛んならんとする今日、先生の逝去せられました事は、まさしく短命と申上げてよいと信ずるのであります。

× 日本の幼稚園教育のためには太陽を失ったも同然、さても寂しい。これよりは、月光によって幼稚園教育を旺盛にするのです。が早く太陽を仰ぎたいの念願や切なる次第であります。其念願の叶う日もまいりましょうが、老生は己に八十三余命幾ばくもなし、さても寂莫の感を深くします。

× 思い出しますと、お茶の水高等師範中川校長時代に、全国幼稚園保姆大会を東京で開かれた。大仕事でありましたが、大成功された。口利きのボス肌の人がありましたな、兎や覺文句を付けたものです。併し、三十代の倉橋先生は、当らざさわらず、纏められて大会も無事完了したなど、其手腕の容

易でない事を知ったのです。

× 其時の事です。其大会に岡山県の教育課長で東大出身の某君が、「幼稚園教育に一言話したいと思って態々上京して来たが、此の会衆の發言者の低級なるに失望した」と申して、憤然として立ち帰った事を知って居る私は、其次第を倉橋先生に話すと、実は僕も失望した、殊に女の發言者が少なくて一知半解のおじいさん達が、人も自分も解らない事を得意になつて、多弁を弄されたのはもてあました。と直話された事もあった。

× 全国保育大会と申しても、日本には頑として合流してくれない地方もあつたらしい。しかし、説かずうらまず、万事其儘で大成功をなさつた事は穩かな腕の方であつた。

× 研究、殊に兒童心理については絶えず、研究されて居ました事は当然であります。が、皇后陛下に、兒童学を進講なさつた時の準備のための研究もさる事ながら、敬服したのであります。先生が増々自信を高められたのは、斯様なチャンスも亦大なりでありましたでしょう。

× 講演は上手でした。あせらず、よどまず、其の上所々にウ

イトを用いられて、ニッコリとなさるゝなど、其道の堂に昇り、室に入ったものであったでしょう。或る講演家が倉橋君の次ぎに講演する事はお断わりだ。実にうまいから、僕なんかまずくて最初から聴衆に逃げられて了うと話して居ました事も覚えて居ます。上手でしたな。それで大きな舞台では『童話』は話されなかつた。或る時、なぜなさらないかと伺うと、それは君の領分だよと、私の肩をたたいてニッコリ、それでいて、私の童話集の批評は深刻なものでありました。

アノ童話集は、息つきと思われる処に二三字分、多い所は一行も文字のない白行の処がある。アソコは息をつく所だ。又『と』と接続する所に、とを上においたり『と』を下においたりしてある。とのおき所で話の呼吸を異にせねばならぬ。実に用意周到だと、著者すら恐縮するような詳評を加えられて居た。著者としての私は汗顔千万であった。

文章は、専門家ではなかつたが、実にうまかつた。文章家ならざる文章家であつた。『幼児の教育』所載の『子供讃歌』の如きは、其白眉のものでありましよう。常に敬読したのでありましたが、一冊に纏められて居るようですが、広くおすすめします。御辺に先生の幼児のうま味がにじみ出て居ます。

倉橋先生の趣味は広がつたでありましようが、殊に文楽の人形芝居はお好きであつた。時々私は私も横好きの為に、新橋演舞場に引越興行がありますと、のぞきましたが、或る時は先生と奥様とがお帰りの道で、一緒になりますと、君も文楽党だから、態々ご苦労さま、僕も今度は三度目だよと、頭を抱え奥様を顧みて笑つて居られた。其場所が歌舞伎座の前でありました。奥様もご記憶でありましよう、思い出して昔なつかしい。

倉橋先生もドイツのフレイベルのお墓参りをなさいました事と存じますが、先生の碑文に『ここは子供の生命の終焉の地』とあります。どうぞ倉橋先生のお墓も左様な銘を彫り込んだ、立派なお石碑が立てて戴きたいのです。(五月十日)

国母陛下に

御進講の倉橋さん

久留島 武彦

私よりずっと年若い倉橋さんの追憶を此の誌上に記そうなどとは思ひもかけぬ事を誠に人生の転変の常ならぬの思うことである。

私が倉橋さんを知り、倉橋さんが私を知って下さったと思つたのは大正の中頃からの事であると思う。

私はその頃、今日の言葉で所謂児童文化運動の一つの実験として、毎年春と冬の学期休みに、三日間帝劇をかりて、児童娯楽会というのを主催して居った。

私の童話と音楽と演劇を組合せ、二時間半ほどの家族的娯楽の会合を催したのであったが、その何れの時の会合であつたか、倉橋さんも参観に来られて、これを見学された後、某氏に私を評した言葉に「君達は久留島君のお話を八釜しくい

うが、私は君達が先生に学ばなければならぬと思うのは、お話が始まってからの言葉や態度ではない。彼のステージに進んで行くその態度の間に、既にわれわれは聞かされて居る事である。先生はその間にすでに吾々に語って居られるのである事に気がつかなければならぬ」と語られたという事を聞いた。

私はこの時ほど強く倉橋さんの着眼点の鋭どさに胸をつかれたことはなかったと同時に真に知己の感に衷心より感謝したのであった。

爾来私は心の友として、常に君の話を聴くのを樂しみ、亦もとめて居ったのであった。其の内誰からか、君が宮中に召されて国母陛下に児童心理とその取扱い方について御講演申上て居るといふことを伝承して、誠に其の人を得たことを宮中の為にもお慶び申上げた事であった。

君の講演は堅くらしい真理を、眼前の真相に無雑作に把握し、表現し円転自在にこれを料理して聴く者をして徹底的に消化せしめねばやまぬ、滋味に富んだものであったので、民間各方面に講演された保育講習会の講演も、亦恐らく宮中の尊貴なる御前に披露された講演も、春風吹渡る花下の集いに楽しい歓談を語り交すがように愉快にして自由な印象を常に聴者に感ぜしめたものであった事が想像されるのである。

君の葬儀に際して、特に皇后陛下より美事な盛花を供えら

れたる、花もの云わねど思召しの有難さは、その香りを通して拝察されたのであった。

君は学者と云うよりは、其の風貌、その言語に、早くより老成な長者の風を示した。信頼すべき先輩、依存すべき識者として学界からも、社会からも、高く仰がれた第一人者であったが、惜しいかな天寿を假さず、ままにならぬ世の中である。誰が今後の児童保育の領域に、真に理解あり滋味ある指導を倉橋さんのように与えてくれられるであろうかは、非常に痛心すべき問題であるが、在天の君の霊も、亦一日も早く斯の人を社会に薦められん事に力を添えられん事を祈るのである。

(童話家)

倉橋先生と「幼稚園」

坂元彦太郎

倉橋先生と私との直接のつながりは、終戦の翌年三月私が

文部省の役人になって初等教育と関係するようになってからのことであった。まだ私が席に馴れないある日、フラリと、

「わたしが倉橋だ」と名のって立ち寄って下さったのはじめだった。その後、先生が文部省に来られる度ごとに、ことに教育刷新委員会が開かれ先生がそのメンバーになられてからはその会合の前後に、きっと私の席の前の革椅子に姿を見せられた。ときには、夜おそくまで、火の気のない文部省の一室で、あれこれと、いろいろな話がつもった。幼児の教育に関してばかりでなく、その外に全く指導してもらったり、相談する相手がなかった私は、倉橋先生からお話をきいたりこちらから話をしたりすることは、仕事の上でたいへんやくだったばかりでなく、気持ちの上で大きなはげみとなった。

私は三十才を過ぎてから小児まひをわずらったが、先生は五十才を越えてからは、しにかかられたという。お互の生れついた小児病性を心から笑いあったこともあったが、一ばん先生をたよりのしたのは、やはり学校教育法を起草する場合に幼稚園の位置をどうするか、という問題についてであった。

学校教育法の起草にあたって、はじめのうちは、幼稚園を正規の教育機関と認めて学校の種類と規定することについて相当の反対意見が省内にもあった。省議の席上、法律顧問(?)として文部省に関係をもっていた東大のT博士がはつきりと反対意見を述べられたくらいであった。また、幼稚園

は、ごく少数者のためのせいたくな施設だ、といった意見の人も多かった。

そこで、そして「国民学校」の名を小学校に変え、中学校高等学校というように名前をそろえることも関連し、さらに「保育園」の問題とも考え合せて、「幼稚園」という名称を変えることによって、一般的な大衆的な教育機関であることをはっきりさせることも、一案として私は頭でいつも考えていた。

ある夜、私は倉橋先生につきのようなことをたずねた。

「先生、幼稚園という名前を、幼児園なり、幼児学校なり、何か適当なものに変えるてはないものでしょうか」

このとき、先生は、いつもとはちがって、すぐ答えをしようとはなさらなかった。しばらくしてから、熱のこもった低い調子でいわれたことばが私には忘れられないものとなった。

「いろいろ考えてくれるのはありがたいが、われわれ明治以来、幼児の教育に献身してきたものにとっては、幼稚園ということばの中に、幼児への愛情と幼児教育の伝統とが結晶したものになっている。幼稚園という名前は絶対に変えないでいてほしい。」

私は、このとき以来、はっきりと覚悟がきまった。どこまでも、幼稚園としての先人の積み重ねた伝統を生かしながら

正規の教育機関としての位置を確定しようと努力する決意ができた。

この少しあとのことであった。先生が、教育刷新委員会の席上で、六・三制の実施と関連して将来幼児教育の義務制も実施することを主張された。先生の席は西側で、説きおえられて、ポクッと大きな座席に幼児のようにはまりこむように坐られたことを昨日のように覚えている。先生の提案は、周知の通り、刷新委員会の決議の中にはいっているが、先生は幼稚園の義務制がそう簡単に実施できるものと思っておられたわけではなかった。先生の幼児教育への熱意は、あの会ではこういう形でしか表現できないものであったし、さらに、私が想像したのは、幼稚園を学校教育法の一章を占めることを促進する援護射撃でもあったのだ。

「幼稚園」と倉橋先生という題をかかげることは、むしろ馬鹿げたことだと、読者は思われただろう。幸にして幼稚園が学校教育の一環としてますますその基礎を固めるようになっていいる現在、終戦直後の混乱期の中におこった、この一つのエピソードを、ここにつけ加えることは、決して意味のないことではないであろう。

師と仰ぎ、そしてほんとに可愛がって下さった先生の御他界の報を受けて、私の背骨から力が抜けたような気がする。外にもいくつかの思出があるが、あの夜の先生のまなざしと

語調にみなぎった、幼児への愛情と幼稚園への熱意とは、いつまでも私をばげましむちうつものとして、残るであろう。

(岡山大学教育学部長)

倉橋さんを憶う

下村 壽一

確か昨年春頃であったと思うが、ゆくりなく浅草の地下鉄の中で倉橋さんにお目に懸った。久し振で観音様に詣り、戦後の浅草の風物を瞥見して面白かったと語られ、四方山の話をお別れした。健康も充分回復され、悠々自適して居られる模様を見て安堵もし嬉しくも思うた。その後研究も執筆も続けられ、最近では「子供讃歌」を編述され一本御寄贈に預ったが、今となってはこの本は、倉橋さんが若い学生頃から子供の問題に取組んで一生苦勞をされた記念塔となつて仕舞つたのは悲しいことである。倉橋さんは円融無礙

懇切周到・機智縦横・八面玲瓏最も洗練された紳士の好典型であつた。教育者として傑出し、殊に児童保育の問題に付ての最高権威であつたことは今更申述べるまでもない。昭和四年文部省に始めて社会教育局が設けられ、社会教育官の新官制の出来たときに、私は無理にお願して兼任社会教育官になつていただき、新らしい社会教育の建設に対して色々と御骨折を願つたが、該博な識見と豊かな体験に基いて、何時も建議し示唆を与えて呉れられたことを今も猶頗多としている。其後昭和十年東京女高師に職を奉ずることとなつたが、在職期間の大半は支那事変に続く大戦争で、誠に多事多難をきわめた。此の間倉橋さんは幹部教授中の重立つ一人として、学校の管理運営・生徒の教育指導万般に互つて悉く参劃し、実際に行届いた世話をされ、真に己を忘れて学校の為に尽された功績は言葉には尽し難いものがあつた。私は倉橋さんから助けられたり、教益を蒙むるのみであつたことを追憶し、今となっては唯々御冥福を祈るのみであることを悲しく思うのである。

(元お茶の水女子大学長)

倉橋先生

齋藤文雄

およそ子供に關係のある仕事をするには本来子供が好きでたまらないといった方々が良い仕事をしているようである。

その人の學問・地位などは二のつぎである。ところがわが倉橋先生にいたっては、學問の深さも地位も御立派だったが、それを動かす源動力ともいふべき「子供ずき」は根本的なものでとても理窟では表わせない。先生の本来のこの「子供ずき」が結局先生を偉大な存在にしたといつてもいいように思う。

昭和十九年といへば戦争もかなりおしつまってすべてが窮乏な時代であったが、先生はそれでも子供のことと頭が一杯だった。女高師の生徒の乳児保育の実習場を作ろうといふことで文部省を動かし、学校から十五分ぐらいのところ疎開

で空家になった幼稚園があったが、それを買いとられた。先生といつしよに二度も三度も足をはこんで、この部屋は何にと計画をねって、不自由な中を徐々に整備していった。先生はわがことのような欣び方で細かいことまで気を配られ、漸く昭和二十年度からは、実習もできそうな見通しもついたのであったが翌年の空襲で無惨にも灰と化した。あれが残っていたらお茶の水大学の学生はどんなに助かったことかと心残りがするが、先生にその後お会いした時、こう申された。「焼けてしまったけど私はよくよくない。倉橋が生きている限りは頭の中にどうしてもまた作ってやろうという意志だけは存在しているからね。君にまた片棒かたいでもらう日が早く来てほしいな」と眼を細めて語られた。

先生のお孫さんが三つぐらいの時わたしたちの病院に健康相談に来られたことがあった。その時は先生御夫妻がおつれになった。孫というものはただもう理窟なしに可愛いものである筈であるが、先生の可愛がり方は暖い理性がとけこんだ愛情で無遠慮に申上げた私たちの意見もよく聞き届けて下さった。細かい言葉のやりとりを書くほど、紙数が許されていないが、この時も先生の御人格に驚かされた私であった。

先生は恩賜財団母子愛育会の設立当時から理事として私たちの仕事に大きな貢献をされた方である。当時の常務理事齋藤守阨氏は先生とは中学時代からの級友であった關係もあつ

て会のためには随分御世話して下さい。終戦後常務理事は他界され、先生は御健康が勝れず、足場のわるい愛育会にも御姿を見せなくなられたが、それでも何かという御心にすることが多かった。

おやじというものは、動けなくてもいい、口がきけなくてもいい、ただ生きていてくれさえしたら私たちは安心してられる。そのおやじのひとりを通り失ったことは私個人としても寂しい限りであり、愛育会の将来のためにも大きな打撃である。先生の偉大な霊におすがりして、将来を開拓してゆくの
が私たちの責務である。
(愛育病院長)

恩師倉橋先生を

しのぶ

武田雪夫

今でも私は、中野のお宅へ伺ったら、あの温顔で、「ねえ

武田君」と、声をかけて下さりそんな気がしてならない。！先生の亡なられたという事が、まだ夢の様で、実感としてせまって来ないのである。私は、これから、先生の恩顧と追憶の二十年にも余る長いフィルムを、くりひろげて見たいと思う。あの慈父にもまさる、やさしさのこもった温顔を目の前に浮かべながら。

×

先生のお宅の二階のあの角のまるい敷物をしいたお室である。窓から茂った青葉がのぞいていた。

今後、幼児のための童話のために専心しようとお話した私に、先生は、しずかに、こんなことをいわれた。それは、今も、はっきり私の心に残っている。

「君が、幼児童話に精進する気持は、全く壮とするよ。幼児童話は、容易の様でいて実は、むずかしいものだからね。」

「幼児童話は、作意が濃すぎでは、幼児の心理に適しないしかといって、あまりうすければ、全くよろこばれない。いわば、無技巧の技巧だね。だから、ただ努力と苦心だけで、よき幼児童話を作り得るとは限らない。もちろん不用意な思いつきなどで、幼児をたのしませ、よろこばすことなど出来ないね。こう考えると、年長の子供の童話に比して、幼児童話の少いのは当然といえるよ。」

そういつて先生は、机の上ののっている、お目にかけて、

この前お持ちした私の幼児童話の原稿をお手に取られながら、

「君の幼児童話に対する態度は、いいね。しっかりやって、よい物をもっとたくさん書きたまえ。」

といわれたが、このお言葉に私は、どんなに励まされたか知れない。全く先生は私には忘れられない偉大なる恩師である。

×

ある年の八月、東海道の辯天島の海水浴場である。その日まで数日間、近くの浜松市の小学校で開かれた講習を了えられた先生は、そこへ休養に来られたのである。電話で浜松へ連絡を取った私は、示された時間に、一旅館に先生を訪れた。先生は大へんよろこばれ、

「やあ、よく来た、よく来た。ぼくは、これから小舟で、島めぐりをするんだが、君も一しょに行かないかね」といわれた。私は、先生のあとから舟に乗りこんだ。

先生は、舟の中にしいた、ござの上に、ゆったりと坐っておられた。私が、自分の故郷が、そこから程近い豊橋であることをお話すると、先生は、にこにこされながら、

「じゃあ、ぼくたちは、東海人種だねえ。ぼくも静岡生れだからね」といわれた。

島の松の枝を吹きならす夕風に舟の中は、昼の暑さを忘れ

さす程涼しかった。私の胸には、卓の上のコップについだサイダーのように、よろこびの心が、ふきこぼれるのだった。

×

やはり、ある年の夏。あちこちの講習会や講演を了えた私は、京都に大塚喜一氏を訪ねた。すると、倉橋先生が、京都へ来ておられるという。ではと、同氏の案内で、先生をお宿へお訪ねした。案内を乞うと、先生は、今、涼んでおられるという。何でも、鴨川べりの宿だった。女中のあとから、廊下を川原の床に近づいて行くと、先生は、

「ああ、武田君、大塚君、こちらへ来たまえよ」と、親しげな声をかけて下さった。

ずい分暑い夜だった。先生は、ゆるやかに開いた浴衣の胸もとに、団扇で静かに風を送っておられた。そして、どこからどこを歩いて来たかと、私の旅のことを聞かれた先生のお顔を、ぼんぼりのやわらかな光が照らしていた。

川風と川瀬の水音の涼しさ。頭上には、美しい星空が、広く広くひろがっていた。

×

これも、ある夏の旅先でのことである。

ある日、大阪の私の宿に、留守宅から、分厚い手紙がとどいた。附箋がついている。裏を見ると、黒々と太い墨の字で「倉橋惣三」とある。開けると、京阪のあちこちの幼児関係

の施設への紹介状だった。旅に出る前お願に上った時、あいにくお留守だった先生が、間もなく帰られてのおたよりだった。その末尾に、「このたよりが、間に合って役立てば幸甚」というお言葉のあったことは、今も忘れられない。もちろんそれは間に合ったし大いに役立って幸した。先生は、いつもこうした大いなる愛情を我々にもそそがれる偉大なる方であった。

×

先生のなつかしい思い出は、いつまでも尽きないが、今頃は花咲く天国の野で、星輝く天国の空の下で、フレールやアンデルセンと、それを取巻く天使の子等と歓語しておられることをしのでペンをおく。

師よ、まずしき弟子を何とぞまもりたまえ。

師は永遠に高く輝く春の星

(童話作家)

×

×

×

先生のこと一つ

多田 鉄雄

幼児教育發展に記された比類なく偉大な先生の足跡が今更に偲ばれる。前夜祭(お通夜)の折、御令闈が先生の用心深かったお話をなさって「主人は石橋を叩いても渡らないとでも申しましょうか」と云われたのであるが、たしかに先生が進まれて行く有様を見ていると、気の短い人々に取っては何か物足りないように感じられたかも知れない。しかし「凡ての幼児に就学前教育を。凡ての幼児が同様の施設で等しく教育を受けること」の理想が先生の胸中で不動の信念をなされており、無理押しをせず、それだけに他人からは窺えないほどの御苦心をつねに払って努力されたのであったし、先生が一旦開拓され建設されたお仕事はゆらぎもない確固たるものとなっていたのである。例えば幼稚園令公布の折は、むしろ

縁の下の力持のような役割をお引受けになられて各方面の力が結集・統一されるように導びかれて、ついにその実現を果されたのであった。終戦後は教育刷新委員会委員として新しい幼稚園制度の樹立に献身されたのであるが、これも決して平坦な路ではなかったのであって、たまたま私は文部省に席を持っていたので、先生は会議の前後によく立寄られて会議における御腐心の有様を物語って下されたものである。この時、外に柔らかく、しかしいささかも節を屈することなく、辛棒強く、一步一步と御自分の信念の向うところに進まれる先生の真骨頂をはっきりと理解いたしましたのである。かくて或はアメリカ側の主張、或は保育所一本槍で進んで来る側の主張に注意深く対処されながら、現在のように幼稚園を学校制度の一環に組入れてその地位の確立に成功されたのである。しかも現制度が保育所と幼稚園がいつでも一元化出来るような含みのあるものに仕組まれているところに、先生の遠い慮かりがあると云える。先生はここまで運ばれた筋道が後に続く人々によって引継がれて行くことを期待されつつ永眠されたものと私は堅く信じている。

(一ツ橋大学教授)

×

×

×

倉橋先生を憶う

日本のフレーベル

竹村

一

日本の幼稚園教育の先輩であった豊田英雄先生、氏原銀先生、膳たけ先生、宇式かん先生近くは望月くに先生方々を失って何だか淋しさを感じている矢先、日本のフレーベルと申上たい倉橋先生を亡くした事は何と云っても寂寥の思いがひしひしと胸にしみ込んで来る。

私が倉橋先生を存じ上げたのは、私がまだ大阪医科大学の学生で、殆ど毎週江戸堀幼稚園の膳先生に師事していろいろとお教えをうけていた時代である。考えてみるともう四十年の昔になる。大阪、神戸と先生の講習の開かれる度毎に沢山の保母さんの中に交って聴講して幾枚かの終了証書もいただいた事であった。特に私の永久に感激の追憶は先生が、私が医科を卒業すれば、東京高師へもう一度入学して三年勉強

し、自分の協力者となり、後継者になってくれないかと仰せられたことである。私は当時から今もつづけてやっています健康教育を生涯の仕事と決意していた事だし、又家庭的にも更に三年の勉学はとも母が許してくれない事情をお話し申上げて御許しを乞うた事であった。然し幼稚園教育は私の最も好きな事であるし、更に先生のその御厚志のほんの少しでもかなえたいと思いつつ今日まで引つぎ細々乍ら幼稚園教育に関係をもっている様なわけである。私がランパス女学院の保姆養成科に教鞭をとる様になった時も先生は、大麥よるこんで下さった事であった。戦前上京すると時折先生におめにかかりに行っていたが戦後全く御無沙汰をしていた。昨年徳島市で及川先生におめにかかった時、私の現況を御伝え願ひ是非一度おめにかかりに行きますと申上げてどうとう御生前にお会いすることが出来なかつた事が残念で仕方がない。今後は後輩の諸君に自分の後をゆずりたいと思うほどの熱意がはたして自分にあるか、斯道の将来に向ってどうだと自問自答してみると恥かしい思いがする。私は先生の四十年前に下さったあの御厚意、御慈愛、斯道への深遠な愛情を身に秘めて残る生涯を先生の後を次ぐことの出来なかつた私、又そんな偉い人間には到底なれなかつた私ではあるが、たとえ細々乍らも日本の幼稚園教育に尽し先生の志にむくいたいと決意している。

もう一つ先生について忘れることの出来ない事は、日本の幼稚園教育第一期とても云う恩物中心の教育を打破してフレールベルの思想にかえれと叫ばれた事である。先生の美しいお言葉の講演、名句名言の講義、日本の保姆諸君は神様の如くにその講義を傾聴敬仰した大正末期の頃、先生が之をよんでごらんと云って紹介して下さった本は「キルパトリックのフレールベルの原理」というのであった。

当時も今も私は語学の力が貧弱な為に処々難解で困ったことであった。そのことをある講習会の休憩時に先生にお話したところが、先生は、あれはむずかしいよ、然し根気よくゆっくりと味って読んでごらんと仰せられた。いまま先生の御人格を考えてみるとあの温容せまらない中に、孜孜としてやまざる根気強い性格が思い出される。先生は名利や地位にあくせくせず、世俗にこびず、人気取りの様なことは一切なさらず、自分から長たらしとする様な野心も毛頭もたれず、日も夜も日本の幼稚園教育に、母と子どもの教育の為にこのみ専念されたという事は幼児教育にたずさわる私達には忘れてならない先生の美しい御人格である。あれほどの先生として著書の少ない事も、不思議な位である。多くの人々が學位をと云々しても先生は我関せずといった態度、あれこれ考えるとただ先生はひた向きに幼児教育に眞実一路を歩んで来られた事が考えられる。

今や先生は亡い。先生の後につづく日本の幼児教育にたずさわる私達は、ただひた向きにこども——日本のこどもの為に精魂を打込んで進みたいと思う。

先生が残された日本の幼児教育の礎石の上に、美しい真に日本のこども、の健康と幸福が打建てられる様に決意したい。

日本のフレーベル、倉橋先生。我等の恩師倉橋先生、どうかいつまでもいつまでも、天の彼方から私達を見守って、私達の行く途をお教え下さり御指図下さらんことをひたすらに祈りつつ筆をおくこととする。

(一九五五、五、一三・神戸大学教授)

倉橋先生を偲びて

内 匠 ち ゑ

嗚呼、今は亡き倉橋先生ノ 先生が、去る四月二十一日奇しくも幼稚園の創始者、フレーベルの誕生日に、御年七十二

才をもって、突然御逝去遊ばされたことを知りましたのは、翌朝の新聞でございました。あまりのことに私はしばし呆然としてしまいました。

思えば私達保育者の大先輩、望月クニ先生を八十八才の御高齢ではありましたが、二月四日に失い、ここに又我が国幼児教育の大指導者でありその第一人者であられた倉橋先生の御逝去をみましたことは、全国保育界にとりましてもその損失は実に大きなものであります。

先生はお茶の水女子大附属幼稚園主事としての多忙の御身の傍ら、各地の講習会、講演会に御苦勞を頂きました。御講演を拝聴する私達は先生の巧みなお話しぶりに暑さも忘れ眠気もふっとんで聞き入ったことは今もなお目前に浮んで参ります。誰かの話に、あんなお偉い先生でもちゃんと原稿をお書きになってその上、このところでしゃれる……等と「注意書き」が入れてありましたとか——何時も聴衆をうっとりさせられた印象的なお話ぶりとも思い合わせ、先生が如何に御熱心にお話下さったか、そのお氣持が偲ばれて、とても有難く、うれしく思うのでございます。

兵庫県へおいで下さったことも数回ありました。最近先生の御元氣な間に一度御迎えたいと話合っていましたのにそれも叶わぬことになってしまいました。大阪へは度々来られましたのでその度毎に参上し先生のお話を拝聴するのを樂

しみに致しておりました。

先生は幼稚園の保育がいわゆる「おしつけ保育」「さずけ保育」であることにあきたりなさを感ぜられ、一人一人をよく守ること、このために小さいグループに分れること、

「自由保育」の形態をとること、等を古くから称えられ幼児教育に一新生面をお開き下さいました。

戦後新教育が叫ばれ「一斉保育」か「自由保育」かと保育の方法やら形体を論ずるようになったとき、その昔すでに先生の御指導による「お茶の水附屬幼稚園」のこの保育を拝見させて頂いたことを思い合わせ、実に愉快に感じました。

又幼稚園で行っている「会集」についても、先生は一つの意見をもっておられました。先生は会集不要論者であられましたが、前記の「自由保育」を称えられる先生にしてこれは当然のことでありましょう。ただ先生が随分昔からこのことを叫ばれたその御卓見には全く敬服の他はございません。

先生は実に子供を守る護神とも言うべき方で、先生の子供に対する御真情は、御著「保育真諦」「子供讃歌」にはっきり現われております。

幼稚園と言うところが「人間形成」の大きな職場であり、子供達の真の幸福をただ一つの願いとして日夜努力している私達は、先生の偉大な御教えをすっかり身につけ更に精進の日をつづげたいと思うのであります。

先生の御冥福を祈るとともに、その御偉業に対し心からの感謝を捧げる次第でございます。（明石市立播陽幼稚園長）

故、倉橋先生の

思い出

玉川喜代子

△

——忘れもしない大正八年十一月十三日——チラチラチラ小雪降る東京駅頭の混雑の中に私共女高師の保育実習科の生徒達は、机を並べて倉橋先生御渡欧のための、お見送りの方の受付をして居りました。其の時の倉橋先生は、一分の隙もない、実にリユウとした、お姿で、大勢の見送り人に御挨拶をされ乍ら私の前まで進んで来られました。

青いおひげそりの後の、クリームの匂いが、今も、はっきり、私の触感の中にあります……

こんな事を或る時の、みどり会の席上でお話致しましたら

倉橋先生は、大いそぎであごを撫でて、その匂をかぐ真似をなさいました。及川先生始め、出席の会員一同の爆笑の中から鎌田先生も、「太平洋の広さかな」なんて、無電を下さって、本当に先生らしいって皆で胸を、おどらせたものでした」と話に花が咲きましたが……

クリームの匂い丈はあれから卅六年間まだまだ、否え、大、倉橋先生の思い出と共に私の一生涯忘れ得ない先生のおかたみとなっていました。

△

終戦となった、とたん、本気で本気で国家の大難に心身共に殉じていた私は、それ丈に、眼の前が真黒闇となり、立ち上る気力も失せ、万策つきて、心から先生に教えを乞いました。其の時、御多忙の先生から西洋紙四枚にびっしりと、直ぐに、御返事を下さいました。文字通り押し載いて再読、三読、はては暗誦するまでくりかえす中に、何か、ハッと靈感のようなものがかすめました。「そうだ、柔かくその一人一人をのばして行こう」そして私は立ち上る事ができました。

前から先生は、天皇、皇后、両陛下に御進講遊ばし、「保育の真諦」「幼稚園の雑草」などの御著書も多く、殊に先生の御講義の面白さは、真夏の講習でも、居眠り所か、ランランと眼を輝かし、夢我の境地で、ききほれたといった方が早いかと思います。

然もその御講義を園児の上に反映させようと思えますと、とてもむつかしく、又其のむつかしい所が、たまらない魅力でもあって、追従を、許さぬ、先生独特の高い理想の下に、日本中の保育会を、ぐんぐんぐん率いられて、幾十年、全く先生は、我が国保育会の太陽であられました。

△

幼稚園が学校教育法の中にはいった事に就て、「其の国家の信任に答える丈になつてくれ」と我々をはげまされ、東に西に、講師として、席あたたまるお暇とてなく、余りの御無理のためか、ついに先生が、御病床の人となられ、そして夏の講習会にも、おでかけになりませんでした。さあ講習員一同の心配は、一とおりでなく、ついに会員一同の醸金となつて代表を以て御見舞に参上する事になりました。そこで及川先生が、倉橋先生の所にお電話をおかけになりました。

「唯今、会津磐梯山が、五六人の方々とお見舞に伺います。」そして広島中央幼稚園の宮内重太郎先生、愛媛今治市の田坂ユキ先生、呉市の利島先生などの先生方と御一緒に、始めて伺った倉橋先生の御住所、可愛いお孫様のお迎えを受け何か先生の御住所らしく、物さびた落ちついた奥ゆかしい応接室でございました。会員一同よりの心をこめた醸金と果物籠を、お受け願ひ乍ら、口口にお見舞を申しあげました事に對し、割とお元氣な倉橋先生は、いろいろ御病氣について、

お話下され、奥様から、お手厚いおもてなしを戴きました。あの事も、この事も、みんなみんな大、倉橋先生をお偲び申上げる一こまであって、余りにも大きい先生の御あとは、口下手な私の、到底よくする事ではございません。唯、唯、心より偉大なる我等の太陽、倉橋先生の御冥福をお祈り申しあげる次第でございます。

(福島県若松幼稚園長)

倉橋先生の御霊前に 御詫とお禮と

田坂ユキ

四月二十二日の朝のニュースで先生の御逝去を突然に伝えられました。昨年の六月研究会でお茶の水幼稚園へ参りました時に中野のお宅へお訪ねいたしました。「よく肥つたでしょう、元氣になりましたよ」とにこにこしながら玄關迄お出かけ下さいましたあのやさしいお姿。崇高な先生の御尊顔が目前に浮んで胸が一ぱい。ラジオの前に立ちすくんでしまい

ました。又来る六月の研究会に上京して先生にお目にかかりお話申上ますことを楽しみにしておりましたに。遠い土地のことで告別式にも間に合いません、誠に済まないと思っております。

お茶の水のバラックの幼稚園時代から大塚の新築に移ります頃の御元氣な御姿を思い出しまして、終戦後九月から又幼稚園も始めましたよ。勇ましくやっていますよ、と云うお葉書を頂いてお案じ申上げておりました先生に、翌年の五月にお久しぶりに園長室で倉橋先生と及川先生とお互に無事を喜びあい、幼稚園も無事先生方も御無事私の方も戦災のため市中に唯一つ残された園であつたことを涙ながらに、

「又やりましたよ、戦うことよりも平和はまだ一層困難だよ」とおっしゃいました。東京大しん災後から今日迄三十余年の長い間、何かと細々幼児教育について御指導いただいた私共は幸福で座御いました。毎夏の文部省の講習は必ず出席し岡山、神戸、大阪、京都とそのつど受講いたしました。私は一層深く先生の御教に預れた者として厚く御礼申上ますばかりです。

今一つ先生の御霊前にお詫び申上ねばなりませんことが御座います。それは戦が激しくなろうといたします昭和十二年の九月に四国四県の保育大会を愛媛県で開くことになりました。特別講演に倉橋先生にお越し願うことになりました、

関係者一同大重で準備を始めました。反面先生には戦場にお

とらぬ強行動。金曜日之夜東京発岡山に到着して高松に渡り、急行で夕方やつと松山着、翌日曜日九時から講演。午後はお茶の水、同窓会の方々との会合その夜高浜から乗船神戸に向う。月曜日の朝神戸から特急で夕方東京着翌火曜日には学校へ必ず出ねばならないと云うこと。地方の幼児教育のためこんな御迷惑をおかけして先生に御無理おさせ申したことが大変心苦しく思われてなりません。いく度も先生とそのお話をいたします度に、「あの時はああするより外に方法がなかったのだね」とおっしゃって下さる程私は、先生に御無理お願いしたことを御病氣の原因の一つにもなったのではなからうかと思つて悲しくなつて参ります。何と御詫び申上げてよいやら言葉が出ません。全国の先生方が先生をおしたいして、御話を一寸お聞かせして頂いたので結構だ。先生の御顔を一目みせてもらつてもそれで保育者になれるのだと云う若い方々の御熱意に、先生に御無理お願いしましたことが濟まなかつたと泣けてなりません。「あの頃は僕も大変勇ましかつたよ」と云つて笑つていて下された先生。今いよいよ御別れて私共はどうした所へ進んでよいかと迷うようではございませが、きつと正しい幼児教育、先生の御教を守つて行く現場楽しいお園をどうぞ御見守り下さい。きつと先生の御意志のあるところを通つて参ります。そうすることによって、先生

の御めい福を祈り上ます。

(今治市昭安幼稚園長)

倉橋惣三先生のこと

津守 真

倉橋先生はこわい所のある方である。

こうして倉橋先生のことをいろいろ考えていると、先生の温和な優しいお顔と、温かい心づかいの数々を先ず思い起す。がそれとともに、一点ぴりりとする秋の空気のような感觸を思う。心から幼な児と母性の味方であつた先生。その先生獨特の柔らかい表情と言葉の奥に、古武士を思わせる嚴肅な氣持を私は感じていた。それは何かことをきめるとき、行動にうつそうとするときどきに、私の予想せぬ質問や表情となつてあらわれ、しばしばぎくりとさせられたのである。

何でそんなにこわく感じたのか。それは先生がいつもものごとの本筋を捉えておられたからだと思ふ。心の奥底で、真

実なことや正しいことについて熱心でないことを嫌っておられたからだと思う。つい忙しさにまぎれて、根本的な筋道を考えずに先生の前に出る時には、何か見すかされるような感じがして、先生をこわく思ったのである。

先生は日本の子どもの幸福を心から思われ、幼稚園を愛して、一生をそのことに捧げられた。ユーモアと詩情にみちた先生独得の表現の中に、何ものも犯すことのできない一筋の真情がある。その嚴肅に生きられた生涯が、この道に生きる人びとからこのように敬慕される所以であろう。この道を多彩に生きぬかれた先生は、実に先生そのものであり、他の何ものでもない。子どもの一人一人が一個のかけがえのない人間であると教えられたように、倉橋惣三先生は倉橋惣三先生である。幼稚園雑草、育ての心、保育法真諦、フレーベル、子供讃歌と流れ来り、完結した倉橋惣三先生である。

ただ子どものことを思い、純粹にそのことのために力を尽くすということは、後の世代の人々にいつまでも伝えられてゆくであろう。それぞれ表現は異なり、働らきは違っても、そのことは先生だけのものではなく、私たちすべてが共通にもつべきものであり、先生の遺志の伝えられてゆくこの道である。

追憶

野口 明

此の春「子供讃歌」をいただいたので、早速拜読して感想を御送りしたところ、それから一月程して御凶音に接したのであった。

私は先生と学問的交渉を持ったのではないから、斯界の權威者として尊敬はしていたが、此の御自伝によって初めて其の然る所以が判った。何新聞であったか「先覚者」の語を用いていたが、先生は明治が生んだ各方面の先覚者、先駆者の一人であったと私にも思われる。

先生は教育界に身を置かれたが、本質的にはむしろ芸術家に類して居られはしなかったか。先生の生涯の御仕事の動機は子供讃歌にあった。学問とか教育とかいかめしい道具や仕事着は持たれたが、先生の真骨頂は子供と一緒に遊ぶところ

に在ったように見える。外遊の時、ミュゼアムを歴訪されて無名の彫刻家の手に成った多数の子供像に、最大の喜びを感じられたと云う思出話は、私の最も感銘深く読んだところである。

私が始めて先生を知ったのは、昭和三年に先生が、赤坂離宮に上られて、皇后陛下に「乳幼児精神発達」の御進講を続けられた時からである。当時私は侍従になった許りで、皇后陛下の御用には関係が薄かったから、詳しい事は存じていない。ただ皇后陛下が御進講を御楽しみにしていらっしゃると云う御噂を耳にしていた。

間もなく而陛下は宮城に御移りになり、それからもずっと御進講は続き、内親王様方の御成長に伴い、御進講の内容も「兒童教育問題」になって行った。

昭和七年に呉竹寮が置かれて、学齢に御達しになった内親王様の御教育が始まった。其の頃は呉竹寮詰の事務官になったので、先生に御会いする機会が幾分増えた。先ず第一に先生を煩わしたのは内親王様に御附添する出仕の人選であった。最初に任命されたのは、先生の推薦による女高師時代の御弟子の水谷春子（現小菌姓）さんであった。其の人選が大変良かったので、先生に對する宮内省の信用は動かないものとなり、爾來女高師から多くの人が採用されたのである。私は昭和十一年まで呉竹寮に勤務したが、其の間に先生を煩わ

して迎えた人として、安藤映子（現藪内姓）、黒木正子（現山川姓）、牧滋子（現岡姓）、川上須賀子（現榎姓）の諸氏を数えることが出来る。私共は先生の推薦は絶対の信用を置いていた。それは近代的日本女性性というものに對する先生の透徹した見識が極めて正鵠を得ていると思つたからである。此の意味に於て先生は照宮様以下多くの内親王様の御教育には、種々の意味で忘れられない人である。

昭和二十四年、図らずも私はお茶の水女子大学長に任ぜられることになった。同校で旧知と云えば実は先生が唯一の存在であった。故に先ず頭に浮んだのは先生で、僭越乍ら先生の上に立つことになるが、旧縁によつて御援助を得たいと念じた。然るに先生は御健康を幾分害されて御引籠り中と聞いて大に失望したことであった。

その頃私が敬服したことは、たしか御退官の御希望に関することで、予め人を通じて先生と打合せをした時、実に清らかで正しく、潔癖で、先生の柔かく温い外貌の中に、そうした厳しい古武士的道念の潜んでいるを發見し、先生に對する敬意を一層深めたことであった。

御退官後にも一二度御目にかかる機会があつたが、いつも春風踏蕩たる御風格を失われなかつた。子供と共に長く暮されながら、先生は人生を卒業された偉大な老人にもなつて居られた。先生の御生涯はまことに良いものであつたと祝福申

上げる次第である。

(前お茶の水女子大学長)

故恩師倉橋惣三先生

をしのびて

林 成子

慈父と仰ぎ敬慕していました倉橋惣三先生は、俄かに天よりの御召で神去られました。その報に接して、只茫然としました。私の今日在るのは、実に先生のおかげです。その先生の御最後のお姿にお会いして御礼の言葉を申し上げ度、御葬儀当日、静岡発午前五時四分で東京へむかい、午前十時頃中野のお宅におうかがいして柩の前にひれ伏した時、あふれ出たとどまらなかつたのは、感謝と惜別の涙でした。私の幼児教育の道は、先生のお教で充満していたからでした。いよいよこの世でのお別れの迫る刹那特別のおはからいで、静かに平和に眠って居られる再びまみゆる事の出来ない最後のお顔をおがませていただき、「さようなら——先生」と、またも湧

き出る涙はとどまらず、青山斎場までお伴して御葬儀に列し永久の御なごりを告げたのでした。故倉橋先生から私個人に尽きない沢山のお教をいただきましたけれども、その中でも最も強く刻まれている事を少しく述べて、先生をおしのびします。

一、お茶の水女子高等師範学校保育実習科を卒業した時

「馬車馬のように身を覆って、わきみをしないで、まっすぐ前をむいて進むようにね」と言われました。雑念をもたないで、正しく精進するようにとのおさとしと思いました。

一、紙製作の研究へ

私が紙製作の研究に興味をもち、三年の後神戸で開かれた全国保育大会の席上でその発表を試み度、先生の御批評を仰ぐべく、原稿をお送りした時、何とも言えない私の期待に反した事実が起ったのでした。それは、三年位では漸く落付いた時だから、発表するのは見合せ、もう二年位たつてからするようにとのお手紙を添えられて戻って来たのです。その時私のがっかりして、しばし、先生からのお手紙をじっとながめるばかりでした。しかし、その時私の胸に脳裡に「読めた」という気持が明るみへ私を案内しました。あと二年、子供と共に生活し子供から大に学べを實際にやってみようと、自分で自分を激励しました。五年研究

の後又原稿を新たにしたため、再び先生の許に送って、御指導をお願いしました。処が又驚いたのでした。何となればその原稿は真赤にすぎ間もない程に筆をいれられてありました。これを大阪で開かれた全国保育大会に初めて発表しましたが、その時先生が私の後で、しっかりやれとニコニコ笑って目で示して下さった事は、勇氣百倍してほんとうに力強く嬉しかったのでした。非常な拍手であった事は前述のように、二カ年更に研究させて下さった事が、私の研究に光彩を添えていただけたので、「子を想えばこそ、親なればこそ」とこのうれしさは今も尙忘れられなく、紙製作の研究に余念ない私は過ぎし昔にかかる先生の慈父としての御教訓があった事を感謝しています。

一、紙製作と紙について

紙製作の研究をするには、「日本紙」と「洋紙」について考察すると共に、紙のいろいろの性質がある事を知っておく事が大切だと、東京のはいばらという紙屋を紹介していただいたので一日中、同店で紙の種類を調べてかえった事があり、それ以来、日本紙と洋紙の長所短所について調べ、それに伴う紙の性質も、どうやら知る事が出来たのです。このように一つのささやかな研究にたいしても、こまやかな、御親切なありがたい御指導を下さいました。

一、私の幼稚園経営に金言を

「林さん、あなたは一生借金袋を大黒様のように背負って行きなさい。借金袋を背負っている間は、進歩し向上して行きますよ」と、激励して下さいました。おかげ様で戦災に会い全焼した私の幼稚園は、先生がお示し下さったこの精神をしっかりと脳裡に刻んで来たので、大きな明るい気持ちで現在の幼稚園の建設が出来た事を感謝して居ます。

先生の御教をお護りとも宝ともして永く私の心に記録し、益々幼児の教育に励げむ事をお誓いして、故倉橋惣三先生の御霊を御なぐさめたいと思つて居ります。

(静岡桜花幼稚園長)

倉橋先生の思い出

平井信義

初めて先生にお目にかかったのは、大学の三年のとき、岡部先生の幼児教育の演習に参加して、「天才論」などいう大

それた題目に手をつけ始めていた頃、昭和十五年であった。五月の下旬だつたと思う、太陽の光がさんさんと銀杏の葉に降り注いでいる午前に、岡部先生や友人と共に女高師の門をくぐった。暗い主事室に入ると、間もなく、眼鏡越しに微笑をたたえた倉橋先生の顔があらわれた。口先をとがらせたようなその口から、「やあ、いらっしやい」と気軽に言われ、みな心の寛ぎを与えたようであつたが、そのあとから「みんなが、子供を研究する積りでここにやってきたのなら帰ってもらおう。子供の研究は子供とよく遊ぶことから始まるのだから」というお言葉。

「帰ってもらおう」という響きが、私どもの胸にコツンと当るものがあつた、殊に研究心を漲らせていた私には、その言葉が更に何回も響き返ってきた。倉橋先生が幼児教育に対して當日頃言われることだと岡部先生から伺つても、それが私には納得できず、「アカデミズムに対する先生の反撥ではないか」と友人に洩らしたりした。そして半日子供たちの遊戯を見て帰った後も、天才論について相変らずあの本この本と読み漁っていた。

女高師の後身お茶の水女子大学に私を推薦されたのは、倉橋・齋藤（文雄）両先生であつた。その頃私には女の学校の先生になり切ろうなどとは少しも考えていなかったのだが、その席で倉橋先生は「君のような人は、だんだん学校の方に

移るんでしような」と笑つて言われた。私にはそんな気持が更になく、先生の一人楽しそうな笑いにつられて微笑し返したにすぎなかつた。昭和廿三年のことであつた。

しかし、その後間もなく私には倉橋先生のお言葉が蘇つてきた。愛育研究所で、子供と終日遊ぶ日が多くなるにつれて益々倉橋先生の古い言葉が忘れられないものになってきた。そして「子供の研究は、子供とよく遊ぶことから」は、間もなく私のモットーともなり、研究はさておき遂に十年間子供と遊び暮してしまつた。いよいよこれから私の本当の研究を始める時が来た。というのが近頃の私の気持である。

「子供とよく遊べ」という言葉はその後も沢山の教育者たちの口を通じて聞いた。しかし、倉橋先生のあの口元から出て来た言葉でない、何だかどつてつけたようにきこえてしまふ。それをききながら、いつも倉橋先生の顔を思い出してしまふ。

先生のお宅へ上るようになって、二階でお話し合つた楽しさを忘れることが出来ない。偉い先生の前へでると、つい固くなつてしまふ私であつたが、急な階段を上つて椅子のおいてあるあの室に入っていくと、不思議とその気持がほどけてしまふ。何でも言えるような気がしてしまふ。いつだったか何のことだったかも忘れたが、先生にむかつて「先生の御意見は違ふ」と大声で喰つてかかつたこともあつた。そんなこ

とをいったあと、いつもなら帰り道でそれが思い返されて頭の中にしこりとして残るのだが、倉橋先生と「けんか」したあとは、かえっていい気持なのである。実際は「けんか」にもならないことだったのだが、帰宅するとよく、「今日は先生とけんかしてきたよ」と家内に冗談を言ったりした。

二、三回お邪魔をしている中に、先生の高弟になったような気持に溺れてしまった。月々に一回、先生を囲んでもっと若い学生も混えて放談会をしようと津守君と計画したこともあった。しかし、間もなく先生が耳を悪くされて、それが果せなかったのは、今以って残念でならない。その間にいつか私は女子教育に大きな興味を持つようになっていた。

なお私の耳に残っているのは、先生の高い調子の声である。一と頃、雑誌「幼児の教育」のことで、先生からしばしばお電話をいただいた。そんなとき、普段の冗談を混えた話し振りとちがって非常に丁寧であって、受話機を持ったまま私は非常に恐縮した。その先生の声が、今もなお「ああ、平井さんですか」と耳元に呼びかけてくる。

(お茶の水女子大助教授)

倉橋さんを思う

藤本 萬治

倉橋さんは、明治三十九年七月、東京帝国大学哲学科(心理学専攻)を卒業されました。私はその年の九月に、同じ哲学科(教育学専攻)に入学したので、学生時代には、倉橋さんを知りませんでした。倉橋さんを知ったのは、倉橋さんが東京女子高等師範学校の教授で、文部省の教授要目改正の委員になられた頃で、私は当時文部省図書館に勤めていて、要目改正に関係していましたので、その時分からよく知り合ったように記憶しております。

昭和二十年二月、私は東京女高師の校長に就任してから、倉橋さんと毎日顔を合せるようになり、親しく交際する機会を得ました。しかし、戦争が苛烈となってきた、勤労動員で学生は学窓から引離され各地に分散して勤労に従ひ、附属高

女の生徒は、新潟、山形両県に疎開し、附属小学児童は富山県に疎開し、倉橋さんの主事をしておられた附属幼稚園児は家庭に留まり、幼稚園は閉鎖の已むなきに至りました。倉橋さんは、こういう状態を世の終りのように嘆かれたようすで、私のところに辞表を出されて一身の進退を託されました。幼稚園教育を生命とされていた倉橋さんとしては、さもあるうとその心境はよく私にもわかりましたが、女高師にとって誇である先生を惜んで、退官を思いとどまられるよう懇願して、独断ではありましたが、倉橋さんの辞意を文部省に取り継ぎませんでした。

八月十五日終戦となり、長い悲壮な緊張もゆるみ、勤労動員も解けて学生は学窓にもどり、疎開生徒児童も各地から帰校するようになり、倉橋さんも諸先生と共に学校に帰って来られました。そのとき先生は頭髪をごく短かく刈っておられて、お元気には見えましたが、敗戦の申訳に髪を落されたのかも知れないと思いました。

昭和二十一年三月には、米国教育使節団が来訪し、次いで使節団の助言勧告によって、新日本の教育全般にわたって改革を行うために、教育刷新委員会が設けられ、倉橋さんは教育専門家としてその委員を命ぜられて、学校外において新教育の建設に大いに尽力されました。また一方では石川謙博士と共に戦後における女子教育の振興のために、「女子教育研

究会」を發起されて、広く女子教育関係の人々に呼びかけ、都内知名な教育家がこれに加わられて、連合国軍最高司令部の民間情報教育局(CIE)勤務のドクター・ホームス女史を招いて助言をきき新女子教育の在り方、方法等について研究協議しました。石川さんと倉橋さんがその会の世話をされました。その研究会で論究してきめましたことは、女子大学を設置すること、家政学を大学の研究科目とすることなど後の教育改革に関係する重要なとりきめをして、その結論を文部省や司令部に提出しました。

昭和二十二年、二十三年は東京女子高師が脱皮して新制大となる極めて困難な準備期でありました。その際に倉橋さんは、外では教育刷新委員会の委員として活躍され、教育刷新の嚮向をわれわれに伝えて下され、内では学部組織特に家政学部の建設に力を尽くしていただきました。

かような大きな転換期における倉橋さんの非常な努力が健康に障ったものか、先生は難聴を訴えられるようになり、小石川東大病院分院で治療を受けられたが、はかばかしくない模様で、次いで身体の衰弱が甚だしく、学校を引きつづいてお休みになるようになりました。附属高等女学校の中沢主事も健康な方であったが、戦時戦後の労苦で長く病床の人となっておられました。ところが倉橋さんはその職責から離れたら療養も思うようにできらうと考えられて、退官した

いと申し出られ、その辞意は相当に強いものでありました。しかし私はまた先生の引退を惜んで、何とかして新制大学の組織の中に加わっていただくと思いとめようとなりました。そうするうちに私は愛媛大学の方に転任することになり、倉橋さんのお申出を後任者に残して立ちました。私がこうした倉橋さんの意志にそわないことをしたことが倉橋さんを苦しめたであろう。また御病氣にも障ったであろうことを考えるて申しわけのないことを思います。爾来、東京を離れたことと多忙を極めたことのためにお見舞もできずうちずぎましたが、二十七年私は退官して東京に帰り、倉橋さんをお宅にお見舞しましたが、その時は病臥中でおめにかかれず、その後は一進一退の御容態と承っていました。が遂に打ちくつろいで昔の苦心談をすることもできずに、幽明相隔てるようになつたことは残念にたえません。終戦後の教育革新のあの難事業に学校の内外にわたつて尽瘁された尊いお働きに對して中心感謝すると共に、わが国幼稚園教育に對する偉大な功績を称えて倉橋さんを思う言葉とします。

(元お茶の水女子大学長)

偉大なる

幼稚園教育家

堀 七 蔵

倉橋先生は明治三十九年七年、東京帝国大学文科大学哲学科を卒業せられ、自ら求め、明治四十二年頃から東京女子高等師範学校附属幼稚園で幼児心理の研究に従事せられた。これが先生の幼稚園教育に足を踏み入れた第一歩である。そして大正六年十一月、東京女子高等学校教授に任ぜられて附属幼稚園主事となられ、大正八年十二月まで、幼稚園主事として活躍せられた。それから二年間の海外留学を終えて帰朝せられ、大正十一年三月より大正十三年十二月まで、二年九月、幼稚園主事として勤務せられた。そして三年間の附属高等女学校主事を経て、昭和五年十一月から昭和二十四年十二月退官せられるまで、実に十九年一月、専ら幼稚園主事として勤務せられた。それで、倉橋先生は前後三回、二十四年間

の附屬幼稚園主事の生活を中心として、四十五年間の長きに亘って、終始、我が国幼稚園教育の發展に尽瘁せられた。その大功績は他に類例がない。実に倉橋先生は偉大なる幼稚園教育家であつたのである。

×

倉橋先生はベスタロチーやフレーベルの如き逆境に立つた大教育家とは異なる恵まれた環境に育ち、まことに恵まれた大学教育を受けた幼児研究の大家であり、恵まれた幼児教育を施す模範的な附屬幼稚園の教育を中心として、我が国の幼稚園教育の發展に寄与せられた大教育家であつた。曾って教育週報は、倉橋先生を評して、

「つきたての大きな鏡餅のようだ」といった。

まことに、倉橋先生の顔容でも体格でも、また人格でも、つきたてのお餅の如く、福徳円満の相に満ち、ベスタロチーやフレーベルに見るが多き生活苦の片鱗も見出すことが出来なかつた。倉橋先生の生活態度においても、その研究活動においても、またその全教育活動においても、正さに偉大なる幼児の本性の發露であつた。倉橋先生は実に偉大なる幼児で、真に天真爛漫、純真無垢な幼児の心靈をその儘大發展させた大教育家であつた。その一言隻句も悉く保育法真諦であつたのである。

×

倉橋先生はその名著、「幼稚園保育法真諦」の序に、次のように述べてある。

「保育法真諦とは、われながら、おこがまし過ぎる僭称である。識者の笑いを買うをおそれる。実は保育法に関する一つの考え方というべきであらう。ただ、その考え方が自分としては、之れ以上動かせないのである。身を幼稚園に置くこと久しい。疑惑と攻究と、又いつも附きまとう遲躓とを経て、やっとここに落ちついた考え方なのである。自分では、少くも今のところ、之れを真諦と信じている。

フレーベルの精神を忘れて、その方法の末のみを伝統化した幼稚園を疑う。定型と機械化とによって、幼児のいきいきしたさを奪う幼稚園を慨く。幼児を無理に自分の方へ捕えて、幼児の方へ赴き即こうとするこまやかさのない幼稚園を忌むつまりは、幼児を教育すると称して、幼児を先づ生活させることをしなない幼稚園に反対する。しかも之れ皆、他に對してのみいふ言葉ではない。そこで、私は思い切つて従来の幼稚園型を破つて見た。古い殻を破つたら、その中から見つけたものが此の真諦である。」云々。(元お茶の水女子大教授)

思い出すことども

村田 修 子

が、これだけはちょっと見ただけで何となく題名に心ひかれ先生の名前を知った。

其の後とびはねることに忙しく、本を手にもすることもなくまたたく間に年がすぎ、女高師の四年となり、途中から始まった戦争の進展に伴いそれに沿った日々を送っていた。そういう中でうれしかったのは、昔心に刻みつけておいた倉橋先生のお講義があることだった。

退屈な時間にはほかのこともしかねまじぎ生徒であったが、先生の時間だけは走って行って一番前の机のとりっこをした。

伺っていると何となく面白かった。「保育」ということのものであるかも知らなかったが何となくひきつけられた。その中で『まっ白いぬりたての壁がある。子どもがこれに向ったとき子どもは、壁が「やい、ここに何かかけるか、出来るならやってみよう」「なにお」というわけで落書をする……』これを面白く話された。これが今でも頭にのこっていて落書を見るとすぐに思い出す。

原理的なことから始まり、段々ほぐれて軽妙しゃだつな話の中ひき入れられノートすることも忘れ、いきもちになつているときベルがなる。はっとして何かからこうなつてきたのかちょっとまごついているとき、その本筋にさつとかえしてくれるのは先生だった。

先生が女高師を退職なさってから、たびたびお目にかかる機会はなかったけれど、東京にいらっしゃる、今でも伺えばお目にかかれる」ということだけで私は心のよりどころを得ていた。何となく安定感があった。お年を召したことも、おみあしの不自由でいらっしゃることも知っていた。けれど先生と死、ということはなんだか考えられなかった。いつでもあのお口からひよいひよいとび出すウィットが感じさせる若々しさとそぐわないものだったから――

・懐かしいお講義

女学生時代図書館の新刊案内に「育ての心」倉橋惣三著と書いてあった。普段は注意しても見なかったところだった

• 先生になる入園試験

病氣、終戦が契機となり田舎の先生をやめ母校の体育の室ですごしていたとき「幼稚園に」ということになり、先生をおみかけするには珍らしい体育館の一室でお会いました。生徒のとき尊敬していた先生に一对一でお目にかかるということ胸がわくわくし顔が熱くなったのを昨日のこのように覚えてる。

眼鏡をかけた人は何となくこわい。その通り、にこやかな微笑の奥に心を見すかされるようなきらりとしたものを感じて、何ということなくひやりともした。こうして幼児の世界に入る為の入園試験がすんだ。

• やさしい先生

或るとき珍らしくMさんを御注意なさった。Mさんはしよげていた。夕方近くになって、先生は心配になったとみえて、私と一緒に帰るように仰言った。私は時がたつのをまって外がうすぐらくなつたころさそつて帰った。驚いたことに次の日「昨日はありがとう。よかつたよ、君が肩をだくようにして帰ってくれたから僕も安心して帰つたよ」と仰言つた。誰一人居らず、先生も大分前にお出になつたのだつたのに、先生はどこかにいらつしゃつて私どもが門を出るのをみていらつしゃつたということが分つたとき、私は涙が出て仕方な

かつた。

• よいおじいちゃま

二十四年八月、先生が待ち望んでいらつしゃつた男のお孫さん、和雄ちゃんとうちの明子が丁度同じ日に生れた。そういうよしみで時々顔合せに伺つた。生れたときは和雄ちゃんの方が大きく御満悦であつた。余り抱かないで育てていらつしゃることが先生は大変御自慢で、感心させられて退出したものだつた。

満一才のお誕生日、一週間前より歩くようになった明子をつれて伺うと、和雄ちゃんは一人で立つてもうすぐ足が前に出るといふ状態であつた。「早いね、うちのもうすぐなんだが……」と仰言つた。

次の年子ども達も大変色々なことが出来るようになった。ホームグラウンドの有利さもあつて和雄ちゃんは大活躍であつた。明子は何をして下さつても泣き声ばかり立てた。

そのとき、NHKより放送なさつた「茶の間のひととき」といふ放送の話題に出てきたお孫さん専用の小黒板を持ってきて下さつて、「何かかいて遊びなさい」といつて下さつた。「和雄かいてごらん」と先生が仰言ると目、鼻、口、手のある人をかかれた。明子は仲々手もふれずやつとまるだけかいた。私が「早いですね」とほめると先生は、今でも思い出すとほほえましくなるような笑を顔いっぱい浮べられて

「去年は明子ちゃんが先に歩いてしまったから、しまったと思つたよ」と本当にうれしくてたまらないという顔をなさつた。それでも「明ちゃんはよそにきているんだからね」と私をなぐさめて下さるおつもりのような言葉を仰言つた。帰途そのことを考へては思はずひとり笑いが浮んできて仕方がなかつた。「先生のからをぬいだよ、おじいちゃま」と。

(お茶の水女子大附属幼稚園教諭)

倉橋先生を偲びて

山口 菊代

環境が商店街に近い為早朝からのラジオはとかく遠慮勝になるのに四月二十一日は午前六時心にもなくスイッチを入れた瞬間、倉橋先生の御逝去が報ぜられました。虫の報らせとさういふのでしょいか先生の御霊が西の端の長崎まで飛んでこられたような気持ちに打たれ幾度か倉橋先生倉橋先生とお呼び致しました。フレーベル先生の亡くなられた四月二十一日、年

こそ異え四月二十一日、倉橋先生はやっぱり日本のフレーベル先生でした。

女子師範卒業の小学校教育を見つめただけの然かも二学期間の経験で幼稚園に飛びこんだ私は、自分の貧しさの為幼稚園教育のよさを味わえなくて五年間苦しみに苦しみました。先輩の先生が一度東京に出て「倉橋先生のお話をきいてごらん」とのおすすめに不精不精上京致しました。昭和三年の夏の講習、今だに忘れられない「積極的保育作用」と題したお講義、私は穴があつたら入りたい思いでこれを伺いました。あの小さいと思われる一事一事が保育上それ程に重大であつたか、子どもを見直し、幼稚園を見直し、自分を見直し、実に自分の行くべき道に明るさと力強さをおみやげにして帰国致しました。そして私は一年交互に上京して、先生のお声にふれることを楽しみとしました。先生のすばらしい教育観に導かれて私の幼稚園への道は開かれました。今私はペンを走らせてあの当時の具体例を思い浮かべつつ感謝の涙に浸っております。

昭和六年一月から幼児の教育の巻頭辞が先生によって書かれました。保育の真心がさわやかな文筆で示されました。又しても私は心ひかれそれを写し始めたのです。幼稚園生活が楽しければそれを目読し苦しければ音読し一カ月に一度はくり返しくり返しくり読みふけりました。

七カ年私はよろこびと躍動で写しつづけました。昭和十一年五月上京の時持参して表紙に「子ども達の中にいて」と書いて頂きました。丁度皇后陛下に御進講直後のモーニングの礼装の先生は「よく書いたね」とおっしゃってほほ笑まれました。終りは昭和十四年八月三度目の御来崎の折上野屋の二階で先生より私の写本の裏に「長崎に来て親しくお会いして」と書いて頂きました。人間教育、裁く勿れ、温、驚く心まめやかさ、先生方よ睡眠を充分とって置いて下さい、涼、動、自分、秋晴、ひなた、感情清算等……私には何にもかえられない力強い魂の記念品でありました。この写書は私が保育研究の時いつもくくりとして必要なものであり、ほんとうの保育の友にだけ借して上げるものであります。四月二十一日の夜、私はお通夜の心でお経代りにこの写本を声高らかに読みふけり御冥福を祈りその教育観とお人柄を敬慕致しました。

昭和二十七年一月、原爆後の仮園舎に先生お作の長崎幼稚園の歌が届けられました。が二十八年三月新園舎落成の時には大勢のお客様の前で子ども達が晴れやかに合唱しました。今も毎週月曜の朝の集りで子ども達に唱われる園歌、先生のお徳は消えることなくいつまでもいつまでも子ども達に親しまれ希望の光となって長崎市内に、日本の海山に否世界の果までも高く低く響くことと信じます。

倉橋惣三先生安らかに眠り下さいませ。

奥津城につづく道辺の落椿

(長崎市立長崎幼稚園長)

倉橋先生を

偲びまつる

山崎とき

たおれし○○さんだきおこし
耳に口あてこととえば

にっこり笑って目になみだ

自発活動も口のうちトコトット——

これは私が大正五年四月初めて神戸幼稚園の保姆に就職した時分に今はなき望月先生から折にふれてきかして頂いたラップ節の替歌であります。この自発活動という言葉がかく歌となり又保育の合詞となって保姆の心をゆり動かし保育の重要な指針となったかと申しますと、大正の初年頃神戸市で開

かれた京阪神三市連合保育会の總會に於ける倉橋先生の保育に關する処女講演「保育の新しい目標」の内容より受けた驚異と感激に起因するのであります。この当時の幼稚園に於ては大體に於てフレイベルの思想に基いた保姆中心主義の保育が行われて居たのであります。倉橋先生はこの講演に於て、保育は幼児の生活を基礎として幼児の自發活動を重んじ具体的に相互的に遊びの中に自然的に進めるべきであるとの新保育論を公表されたのであります。永い伝統の中に安んじて居た京阪神の多くの保姆達は恐らく驚異の目を見張り、この型破りの新しい新保育論に思わず引入れられたことであつたと思ふ。さてこそこのラップ節が生れ、合詞となつて新しい保育が芽生たのであります。口絵、大正初年頃の写真は実に其御講演直後会場であつた梶一高女で神戸の保姆達に囲まれた若き日の倉橋先生であります。

歳月は流れて五十年、其間先生が我国全体の幼稚園、保育所否全幼児の爲にお尽し下さいました数々の大きな御功績は燦々と照る太陽の如く今更私などの拙ない言葉で申し上げる何物もございません。

唯最後に、思う事をなすとげるまでには永い年月を要するものであります。先生が一生をかけて全国にお時き下さいました保育の理想の種は五十年の歳月を経て今や漸く全国到る処に其实を結びつつあるのではないかと思ふのであります。

今日の私共の保育はたとい先生の保育真諦には程遠いものがあるとしても其精神にははなれないだけの保育が生れ出て先生に喜んで頂ける域に進みつつあることを信じ先生への無限の感謝を捧げて倉橋先生を偲びまつる言葉と致します。

(陸学園女子短大助教授)

倉橋先生の思い出

山下俊郎

わたくしが倉橋惣三先生というお名前を知つたのは、東大心理学科の学生時代で、はるかなる大先輩としてお名前だけを知っていただけである。直接お眼にかかったのは、大学卒業後間もない頃、大日本聯合婦人会の家庭教育相談所にお手伝いしていた時に、婦人会に見えた先生に文部省の誰方からか紹介していただいた時である。しかし、直接にお眼にかかつてお話を伺うという機会は一向になく、わたくしはいつも

先生の書かれたものによって先生に接触していたといっている。

先生に、直接に、そしてしばしば、お眼にかかってお話しを伺い、こちらもいろいろとお話しするようになったのは、わたくしが愛育会に関係するようになってからであるから、昭和十一年頃からである。愛育会の創設の時から、いろいろと面倒を見て下さったのは先生であり、またのちにわたくしの勤務の場所となった愛育研究所を創設する上にもいろいろと骨折って下さったのも先生であった。とくに研究所が創設されて後は、わたくしの属する教養部の研究打合せ会には研究所の顧問としてよく御都合をつけて御出席下さった。いろいろとみんな議論をしていることについて、実に明快にすじ道をたてて整理して下され、先生独得のユーモアを交えながらはげしい議論を見事にさばいて下さったものであった。そのさばき方には、わたくしは実に驚いてしまつて、こんな頭のいい人は珍らしいという感じを強く持ったことをおぼえている。わたくし達の愛育研究所における研究はこのような先生の支持があつたからこそ、実を結ぶことができたのだと思う。

先生にとくに親しく接する機会に恵まれたのは終戦後のことである。新しい学校教育法の制定に当つて先生が教育刷新会の委員として、また幼児教育に關しては当時の坂元彦太郎

課長の相談相手として大変な努力をなさつたことは誰でも知つてゐることだと思ふ。わたくしは、その後保育要領編纂のとき、先生のあとにくつついてヘファナン女史の主筆する委員会ですべて頂いたのであるが、この委員会の時きも先生は指導的な役割をつとめて下さった。ことのできあがつたものを全体としてまとめ、これに全部眼をおして形をつけて下さつたのは先生であつた。今日、保育要領に代つて新しい幼稚園教育要領が出るようになったが、わたくしは保育要領の精神は依然として今日の幼児教育にも貫いているべきものであり、また貫いてゐると思ふ。そして、保育要領に盛られてゐる精神はすでに三十年前に先生によって打ちたてられた幼児教育の精神なのである。先生は「新教育新教育とよくいうが、われわれが三十年も前から言つてゐることが、やつとこの頃になつて認められ、人がいうようになったのだよ」と、よく言われたものであつた。

昭和二十三年には、倉橋先生を会長として日本保育学会が生まれた。日本の保育が科学的研究の基礎の上にあるようにとの先生のお考えがわたくし達に徹して、わたくし達若い者は先生の御指導によつて今日まで学会のことをいろいろとやつてきた。今年第八回の大会を持つことになつた日本保育学会は、先生の晩年の熱情を注がれたことによつてここまで成長してきたものである。

先生はいつも温い、すべての人をつつむような広いヒューマニズムを持って居られた。どんな時にも接する者に暖かいおびきをかけて下さった。そして先生の暖かい愛情をふんだんに受けた者は、日本中の幼児であり、また幼児保育者であったと思う。いま、あの先生の温顔に接することができなくなったとは、わたくしはどうしても思えないのであるが、先生の暖かいヒューマニズムが全幼児保育者の心にしみとおっていることを思えば、先生は永遠に幼児保育の中に、また幼児保育者たちの心の中に生きていて下さるのである。そして先生を永遠に生かす道は、お互い幼児保育者が保育の道を常に精進と研究とを以て高めて行くことにあると思う。

倉橋先生を偲んで

山村 きよ

日本の子供達のために多くの幸福を与えて下さった倉橋先

生。

子供達と一緒に生活することの幸福を教えて下さった倉橋先生。

日本の国の隅々にまで真の幼児教育理論を滲透させて下さった倉橋先生はフレイベル先生の誕生日、四月二十一日に突然御他界になりました。

故倉橋先生も又日本のフレイベル先生として、いつまでもいつまでも日本の子供達のためにより幼児教育者を世の中に送って下さるように、きっと幼児教育の神様として私共幼児教育関係者はいつまでもお慕いすることだと思えます。

先生は私共卒業生のためには仕事の上にも又個人的にもほんとによりお父様であったことをいろいろと想い出させて下さいます。私が最後にお目にかかりましたのは四月三日の夕方、丁度クラスの者五、六名で（東京在住の）卒業して満三十年を越えた記念の会合でもちたいと相談の会合を終って、その時には是非倉橋先生御夫婦の御出席をお願いしたいものと夕方の時間をも忘れて参上したのですが、今から想えば何か虫が知らせたとも云うのか？……不思議な感情でお別れしてしまいました。それは、私共が夕方の時間を遠慮がちにお話するのを「まあまあ」と引きとめて下さったり、こと更なつかしんで下さって、始終笑いをうかべて私共の話をきいて下さったり、帰えりがけにはクラスの一昨年若

い市橋さんに両手をとられて静かに、静かに足を運ばれながら玄關まで御見送り下さったことです。しかも私共の姿が玄關から門外に出るまで戸をしめてはいけないうと奥様お指図されて……にことごと笑顔で見送って下さる先生のお顔をふりかえりながら、三つ四つの子供がするように「バイバイ」しながら……私共は最後には後むきになってお別れをなつかしみながらあの中野のお宅のお玄關から御門までの間をあんなにも後髪ひかれる想いで辞してきたことがふしぎ想われて、今更のように先生のお姿を偲んで居ります。

今から三十二年前關東大震災の後お茶の水のバラック校舎で吸いこまれるようにきき入った先生のお講義の中の言葉は今も尙はつきり耳にのこって居ります。

「自發活動の尊重」

「子供の興味の問題」

「自由保育に流す、生活を、生活で、生活させる根本精神」
等々

今私共が目の前の子供の姿をいろいろの角度から「親切」にみつめることができるのはほんとに先生のおかげと思えます。私ばかりでなく全国いたるところに先生のお教をうけた幾多の幼児教育関係者の方々がいつもいつもこうした先生のお言葉の数々を想い出されて、それぞれのお仕事に、「光と力」をうけてほんとの幼児教育のために自重してゆかれるの

ではないでしょうか？ おそらく日本中の幼児教育関係者はあまりにも突如として逝かれた倉橋先生のお姿を今更の如くあれこれと偲んで偉大なる御功績をたたえて居られることと
思います。
(東京文京第一幼稚園長)

倉橋先生と私

和田 信 蔵

先生には殊の外親しくしていただき、度々温顔に接して御導きを賜った私としては、数々の思い出を持っているが、その中の二三を追憶して見たいと思う。

先生と私との関係は二十二年前より続けられていたが、始めて御親交を得た当時、私自身大学出たての幼稚園長であつたし、何かと先生の御教導をうる機会を求めていた時期でもあつた。

丁度その頃、大阪の私立幼稚園関係者が幼児教育振興のた

めには、先づ教育内容の刷新改善を計らねばならぬ。そのために研究の面が大きく取り上げられ、その指導を倉橋先生に御願ひすることになった。

先生は私達の意のあるところを諒とせられ、終戦前迄毎年夏大阪に御越しになって親しく御指導を賜ったことは忘るることの出来ない思い出である。

その後終戦間もない昭和二十二年八月に又先生を御招きして講習会をもつ喜びを得たのであるが、当時物資極めて乏しく、その時先生と俱に一夜を帝塚山の一旅館にて、酒を酌み乍ら過したことが今強く臉に浮んで来て、何とも云えぬなつかしさを禁じ得ない。

先生も師弟の間柄とは云え、酒をとにもすると所謂酒のみ友達と云う感じで会えばよくのんだものであるが、帝塚山の時には酒が手に入らないので困り果てて、結局窮余の策として自家製のものを差上げることはしたが、それが先生には大変御気に入る、

「うまい、和田君のつくった酒だから余計にうまい大阪へ来て酒はのまれないと覚悟をきめてきたが」

と云われて夜の更けるのを忘れて寢床を前にして語り続けた。

先生との話題の内容は、今から考える私自身大変迂闊な事であったと思うが、理論めいたテーマは先生からも私からも

持ち出さず、専ら幼児の世界を漂うが如く、幼児の夢を見続け乍ら、何時果てるともなく語りあかした事は、私の生涯再び相眼見得ぬ観喜と感激のひとつであった。

又昭和二十八年十月大私幼連創立二十周年記念式挙行に際し、大私幼育成の恩師として御来阪を御願ひした処、快諾いただき、御不自由なる身を押し御夫人同伴にて御臨席の上記念講演をしていただいた事が最後にならうとは。

その折、新大阪ホテルに御とまりになっていたが、或る朝食後、ホテルの廊下を杖をついてコトコトと歩き乍ら童顔を綻ばせて、「大阪へ来てとても愉快だ、今朝はとても調子がよい、大阪へ来て神経痛が活きたらしい」それを聞いて、御呼びして「ああよかった」と胸をなでおろしたが。

「和田君、大阪も幼稚園がたくさんふえて盛んなことは結構であるが、それに比して大切なことはたゆまざる研究の道だよ、研究の面が盛んな状態にならなくてはいけないよ」

この言葉は私達にとって一旬千金に値する思いがする。

関西旅行を終えられて帰京後ずっと床におつきになっていることを聞いて、深く心を痛めていたが、今又悲報に接し哀悼の極み、これにすぎないものはない。

謹んで、先生の御冥福を心から祈ると共に、私達に与えられた幼児教育への道を、まっすぐに進むことも誓って、先生の名き御霊に捧げたい。

(大阪府私立幼稚園理事長)

昭和三十年度文部省主催 幼稚園教育研究集会予告

一、会場県と会場

(東部) 神奈川県 横浜国立大学学芸学部

(鎌倉市雪の下九二九)

(西部) 岡山県 倉敷市立万寿幼稚園

(倉敷市浜町五九二)

二、期 日

(東部) 八月二四日(水)―八月二七日(土)

(西部) 十月十一日(火)―十月十四日(金)

三、会場別参加都道府県

(東部) 北海道、青森、岩手、宮城、秋田、

山形、福島、茨城、栃木、群馬、埼玉

千葉、東京、神奈川、新潟、山梨、長野、

静岡

(西部) 愛知、岐阜、三重、滋賀、京都、大

阪、兵庫、奈良、和歌山、鳥取、島根

富山、石川、福井、岡山、広島、山口

徳島、香川、愛媛、高知、福岡、佐賀

長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島

四、研究内容 講義、班別研究その他

五、班別研究の主題

東 部

第一班 幼児を集団生活に参加させるには

どのような方法が適切か

第二班 遊具による健康の指導はどのような

にしたらよいか

第三班 数遊びの指導はどのようにしたら

よいか

第四班 言葉の指導はどのようにしたらよ

いか

第五班 幼稚園教育の効果をもとめるために

家庭教育との関連をどのようにした

らよいか

西部は、第四班が「自然の指導はどのよう

にしたらよいか」と変る他は東部と同じ。

六、参加者 各都道府県教育委員会、都道府

県知事および大学長がすい選した者。

七、その他 詳細は各都道府県へ問合せのこ

と。

おことわり

本誌七月号は、とくに取急ぎ編集いたしましたため、本号の掲載洩れになりました分につきましては、今後も引続き掲載いたします所存であります。何卒御諒承おねがい申し上げます。

編 集 部

▽ 講習会 二 つ △

この夏も、左の二つの講習会を開催いたします。例年同様、皆様多数御来会下さいますよう御案内申し上げます。

お茶の水女子大学主催 幼稚園教員免許法認定講習会

○ 期 日 昭和三十年七月二十一日―七月三十日

○ 会 場 お茶の水女子大学附属幼稚園

○ 科 目 単位・講師

教職科目、保育内容(社会)二単位
講 師 お茶の水女子大学助教授 平井信義氏
" " " 松村康平氏
" " " 水原泰介氏
" " " 津守真氏

○ 実 費 一講座(一単位)につき二〇〇円
○ 受講資格 幼稚園教員免許状所有者(仮免・二級普通免許状)

日本幼稚園協会主催 保育講習会

○ 創造性をひきたす簡単なあそび

講 師 お茶の水女子大学助教授 戸倉ハル氏
○ 期 日 昭和三十年七月二十一日―二十五日 午後一時―四時
○ 会 場 お茶の水女子大学体育館
○ 会 費 三〇〇円

昭和三十年七月

お茶の水女子大学附属幼稚園内

講習会 係り

幼児の教育 第五十四巻 第七号

定価金五十円

昭和三十年六月二十五日印刷

昭和三十年七月一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

○本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館にお願いします。